●本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

●女子に大に讀むべく男子盛ん讀まざる可からず

失はれたる汝を回復せよ

（一）

白木屋や、三井呉服店の前に行くと、大底の婦人が其美しき品物に見とれて、其品を手に入れたくなる、又、天賞堂の店頭などに立つても同じことで、寶石入の燦然たる指環や、時計などを見ては、遂ひ財布の口を開き度くなるのも無理では無い、そして家に歸れば、家計の困難に苦しめられて深く後悔するとも尠くはあるまい。

併し、此の如き有形なる失策は、直ちに吾等自ら明かに看取することが出來る、又、直ちに數量に見積ることが出來る、然るに此に婦人の大いなる失策がある、其失策が大きい丈け、其失策を爲せし時から幾百千年といふ長年月を經過して來た、而して失策の結果、婦人が失ふた所のものは金錢や財産といふ樣な粗末なものでは無くて、モツト／＼人生に緊要なるものである。

（二）

今日の婦人は一個の人生たるの自己を失つたのである。

併し、此失策は今日の社會からは現に一種の美德と稱せらるゝ所の行爲に依て出來たものである、即ち今日の言辭を以て言へば「愛」といふ美しき感情によりて大失策を來したのである。子を愛するといふ婦人自然の感情より來れるものである、而して其結果として、社會に於ける婦人たるの資格を全然犠牲として了つたのである。換言すれば、古來久しき間、天下の婦人は自ら自己を失つたのである、而して財布の金を失つた樣に容易くは之を發見することが出來ないのだ。

社會學者の説く所に依れば、太古の社會に於ては婦人は却て家族の主たる如き干係があつた。社會の承繼は婦人を通して行はれた。之を母系組織の社會といふ。然るに農業其他の産業が漸く發達するに從て、何時しか腕力ある男子が産業上の權力を把ることゝなり、從て組織の如きも男子の意に從つて行はるゝ事となり、社會は男子を中心として組織せらるゝに至つた。而して女子は全然男子の奴隷となり了した。此時代を父系組織の時代といふ。

女子が若し「姙娠」といふ運命を有せず、「小兒哺育」てふ責任を有しなかつたら、決して此の如く徒らに男子の奴隷とならなかつたであろう。併し、之あるは固より女子の天命にして如何ともすることは出來ない。たゞ此の如き天命を有する爲め、換言すれば小兒が可愛いといふ感情の爲に、女子は自己本來の機能までも一切之を男子に委ねることゝなつたのは如何のものであろう。之は誠に婦人の美德である、而も此美德は却て婦人自らを奴隷の境涯に投じたのである。

（三）

婦人が家庭の長たる機能、社會の主宰たる機能、國家の統轄者たる權能を男子に委ねて、自己は專ら可愛き小兒の養育に心身を傾くるに至つた精神には、素より崇高なる美德が含まれて居る。英國のドラモンドは人類社會に「母」といふ者が出來て、初めて「愛」といふ現象を生じ、又、茲に道德といふものゝ萌芽を發した、と言ふて居るが、實に愛兒の爲に自己の總てを犠牲として省みざりし「母」の生涯が、人類社會に大なる教訓と光明とを齎らしたとは到底否定することは出來ない、然も此美德は遂に天下の婦人其ものをも打倒すに至つたのである。但し、始めより我が「愛」の犠牲となつたものなれば決して悔ゆるに足らず、又、是れ自然の勢ひなれば矯正すべきものに非ずと言へば其れまでのことである、併し、能く／＼考えて見れば、今日の婦人が男子の奴隷となるのは、決して最初の犠牲的精神に基くに非ずして、寧ろ其奴隷となるの習慣、換言すれば、化石的習慣に盲從したる結果に過ぎない。

一つ例を引いて説明する、昔しから、菊は節操を表はす花だと言ふてあるが、之れが、其潤い美しい花を開くに初めは支木などを用ゐなかつたであろう。然るに漸く進んで人工を以て大きな美しい花を咲かせる樣になつては、必ず之に支木を與へねば到底菊自らの幹を以ては其花の重量を支へることが出來なくなつた。支木は菊に欠くべからざる必要物となつた、恰も婦人が姙身期及び哺育期に於て到底男子の補助を待たねばならぬことに立至つたと同樣である。處が、可笑しいのは、此支木を施すことが菊の栽培に習慣となつたものと見えて、其必要も無さうな菊にも、一々支木を施すことになつて居る、然も其れが菊天然の美觀を毀損すること甚だ多大である。

（四）

栽培者本人は眼も心も其支木に慣れ居るため之に氣が付かぬかも知れぬが、傍觀者から見れば是れ甚だ無意義な仕方のみならず、菊の天然を害することが著しく眼に付くのである。人間にしても之と同じ事で、婦人が姙身期、哺育期に於て男子の助力に依て生活せねばならぬ事は當然のと、又、平常にも婦人が主として其家庭に在るは自然の結果であろう、併し、其の爲に婦人が法律上に於て男子の下に位する理由は少しも無い、社會國家の事は男子と平等の權能を以て婦人も之に參與するが當然である。

然るに今の婦人はドウであろうか、夫ある婦人が、一切を夫に打ち任せて、己れは單に食物を消化して空氣を呼吸して而して夫の玩弄となる所の一種の人形を以て滿足するは勿論のと、未だ夫あらざる婦人までが、やはり男子には到底絕對の服從をせねばならぬと觀念するに至つた。甚だしきに至つては主客顛倒して痴情の爲に子の愛を犠牲とする者さへ起るに至つた。是れ、實に、菊の花の如何に係はらず、支木が無くては心行かぬと感じて遂に菊其ものゝ姿を毀損する所の栽培者の如き者である。

（五）

莊子の「齊物論」に次の樣な事が出て居る

「莊周が自ら胡蝶となて、ヒラ／＼と飛び舞ふ所の夢を見て、實に愉快で堪らなかつた、處が俄然夢覺れば我は儼かに周である、周が夢に胡蝶となつたのか、胡蝶が夢に周となつたのか」といふのである。「愛」の使命を持て生れた婦人は何時しか、奴隷を美德とする樣な夢を見るに至つた。而して婦人が男子の隷屬たるは、是れ「愛の化身」たる婦人の天職なりと妄信するに至つた。子の母たる者は家庭の奴隷たらざる可らずとするに至つた、而して女と奴隷とは異字同義のものとなつた。莊周と胡蝶と本末を分ち難くなつたと同樣なのである。然れども一たび其夢想より醒め來つて婦人自己を觀察すれば、本來の婦人の使命と、現在の婦人の境遇とは遙かに／＼隔つて居ることが分る。

最初母系組織の社會から、父系組織の社會に轉じたのは、實に社會の大革命で、此革命は既に有史以前に行はれたものだと言ふ。母は「愛」を代表して、父は「腕力」を代表せし當時の社會が父系組織に變じたもの故、腕力が愛に勝つたものと云ふて差支は無い。腕力を以て財産を積集占領して財産私有制と武力專制的社會とを造り、一夫多妻制起り、奴隷制度起るに至つたのである故に財産私有制度あり、權力的政治の社會を存する間は、「愛」は此世より失はれたるものと言はねばならぬ。婦人の使命は社會より失はれたるものと言はねばならぬ。然り、婦人が子を愛するの情は、婦人を驅て男子の奴隷たるに甘せしめ、此世を權力政治の社會と化して了つた。而して茲には婦人自ら「子の愛」其ものをも滿足することが出來なくなつた。初めパンを求めて「自由」の途を犠牲としたる婦人は、今やパンを與へられずして、却て石を以て酬いらるゝに至つたのである。固より此の如き者は、資本家の妾女郎の類 [illegible] ざる所である然れ共、[illegible] 家庭を担任する者は、常に切に感ずる所である。

（六）

然らば、如何にせば此の如き苦痛なる境遇を脱することが出來るか、何かず、男女平等自治の社會を造らんには、換言すれば、自由共産の社會を組織して以て男女が共に其天職の使命を盡さんには。

婦人本來の使命を自覺せよ。而して失はれたる汝を回復せよ。汝が汝の [illegible] を回復せよ。是れ婦人自らの任務なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海內時事

○別子煙毒問題

△別子銅山の煙毒問題が世の重大事件となれるとは讀者の既に知悉する處なるべし、吾等は今ま繰返して其騷動の成行を細記するの必要無し

△別子銅山の煙毒が同地方數十ヶ村の農作物に多大の害毒を及ぼすとは既に久しき以前よりして世の注意する所となり、被害農民の愁訴も年々に悲壯を加へ來り、地方廳にても痛く之を憂へて屢々住友鑛業主に注意する所ありしが、中央官權と結びて橫暴に馴れたる住友家にては却て之を冷眼視して容易に其調査をさへ施さず、遂に農民の大活動を見るに至れる也。

△由來農民は篤實にして吾が家、吾が國を天地と頼みて繩墨の外に多く願ること無き農民等が、男女擧つて家をも田をも棄て、奮起するに至れるはよく〳〵窮迫の事情あるものと察せざるを得ず、而も新聞紙の傳ふる所によれば彼等は甚だ自治の精神に富みて能く秩序を守り、農民一揆に免れ難き不規律なる暴動に出づること無く、旗鼓堂々資本家並びに政府者と對陣して威風を揮ひしと、深く天下の人をして同情を寄せしめ讚美の聲を放たしめたり。

△將來我が日本に於ては、此別子地方の農民の如く、自ら隊を組みて自己利害の爲に戰はざる可らざるの必要、各地方に生起すべし、吾等は別子地方農民諸君が日本農民に對して好模範を示されしことを深く謝するもの也。

△然れども吾等は尙ほ別子地方の農民諸君に警告すべき一事あり、即ち諸君の運動が今や實に其一大危機に迫れること是なり、諸君が、誠意を以て資本家と對談し、誠實を以て進陣し、社會を亂さず、人心を驚かさず、正々堂々として事を處理せるは固より吾人の深く賛同する所なるも、惜むらくは諸君は實に長蛇を逸したるの憾み無きを得ず。

△先例は既に足尾鑛毒問題に於て示されたり、次で谷中村問題に於て示されたり、足尾鑛毒問題及び谷中村買收問題に際して同地方の人民が意を決して起てる光景は寧ろ遙かに諸君以上にありとするも決して諸君以下にありと云ふ可らず、加ふるに熱誠と精力との充實せる神の如き田中正造翁の其中にあるあり、而して諸君に勝る幾層倍の活劇を演じて、尙ほ且つ得る所は三十萬圓の豫防工事と地稅救免に止まりて終に鑛業の停止を見る能はざりき。

△蓋し事、斯の如き結果に至るもの資本家の奸策に基ける也、資本家は其金力を以て官權を利用し、奸策を逞しうして農民を詐き、虐げ、軟化せしめ、墮落せしめ、強迫し侮辱するに甚だ異能あり、足尾、谷中の兩問題は之を證明して餘りあり。

△別子地方農民諸君が住友家工務部長に對面するや、部長は言を巧みにして諸君の靜肅に退却せんことを哀訴し、而して害毒防止に就ては諸君に對して一言半句の約束をも與へざりき、然も憐れむ可し、素樸正直なる諸君は能く此狡猾の言を信じて靜かに退却せり、知らずや、工務部長が諸君の後姿を見やりつゝ左右を顧みて紅の舌をペロリと吐き出せしことを彼が胸中には此時勝利の歡喜の湧くが如くに溢れ出でしを感せしならん、而して更に「憐れむべき農民よ」てふ嘲弄の語は彼が心裡に迸り來りしならん。

△見よ、其後に於ける資本家の態度如何なるかを、鑛山の重役會議に就き新聞紙は報じて曰く

中田理事は二十七日住友本店に著し久保支配人ら二十八日午後歸店せしを以て鈴木總支配人は直に本店樓上に重役會を召集し煙害問題の善後策を協議したり今其經過の一斑を聞くに四阪島精錬中止は絕對に出來ざるのみならず損害賠償も昨年の標準上一時農民の滿足する丈の金額を支出するとも後に至りて必ず苦情の發生するものなれば到底充分の解決を與へ難ければ今回は相當の應急善後處分を施して一應事件を落着せしめんとするものゝ如し

重役等の意向は右の如く冷淡なり、而して其施設も一時の彌縫に止めんとす、幾度か苦情に苦情を重ねて尙ほ然かく苦情の發るべからざる施設に止めんとす、彼等の橫暴なる今更に驚かざるを得ざる次第也。

△彼等が唯一の秘訣は事件を延引するに在り、蓋し是れ第一に餘力に乏しき農民の根氣を消耗する手段なり、第二に此間に於て計略を回らして以て地方の先覺者を買收するなり。第三に此の如くにして世人を瞞着し世論を鎭壓せんとする也、第四に此間に於て政府者を驅使して鎭壓の準備を調せしむる也、彼等は富力に餘あり、彼等は人才に饒かなり、地方農民の憤激を壓殺して自己の私慾に飽かんとする、坦々たる平地を歩むよりも易かる可し、別子地方被害民の前途を想ふて吾人轉た肌の寒きを覺ふ。

○非愛國者の續出

國家の組織、國家の活動にして本然の人情に浴ふものならんか、外部より如何に之を強制するも人民は決して非愛國者となること能はざる可し、近時我國に於ては、軍隊の內と軍隊外とを問はず、一般に非愛國の思想と行動との橫溢することは何人と雖ども非認する能はざる著しき事實にして、政府者を始め、世の所謂愛國者の憂慮すること一方ならずと聞く、殊に軍機漏洩事件の續出することゝ、徵兵忌避者の數、年々巨多に赴きて軍國の基礎に一大禍根を成長しつゝあることとは、彼等の甚だ焦慮する所なりと云ふ、然れど眞の非愛國者は決して軍機漏洩者、徵兵忌避者に非ずして、却て今日の政治家、資本家、政府者に在ることを知らば、否、國家其ものが非愛國者を出す原因なることを知らば、之が禍根を斷絕するは一本の草を摘むよりも容易なるべし。

○大博覽會の延期

博覽會は一種の戰爭利品展覽會なり、資本家が勞働者の生產を掠奪したる其捕獲品を陳列して以て互に其大小高下を爭はんとするなり、されば吾等勞働者は博覽會に對して何等の利害を有せず、其延期は素より吾等の係はり知らざる所なり、然れども、之が爲に根底淺き我が經濟界には忽ちにして恐慌の襲來するあるべく、而して最も多く最も痛く其影響を受くるものは吾等なり、吾等は大博の延期を惡まずと雖ども、其不景氣の結果を直ちに一に勞働者に轉稼せんとする資本家を惡む。

○安井哲子女史

品性高潔にして學識才能亦大に同門に卓越せりと稱せらるゝ安井哲子女史は先頃英國より歸朝して學習院女學部の教授となる、風聞によれば是れ女史が餘りに高尙にしてお茶の水の幹部に容れられざる爲なりといふ、果して然らば是れ寧ろ女子の爲に深く祝すべき事なり、然れども吾等は茲に一顧するの餘地を有す、由來日本は階級思想に富みて、平民の子の卑まるゝ國柄なり、而して貴族臭味の多きは殊に教育界に甚しく平民子女の爲に設立せられたる學校の如きは日本國中未だ一も存せず、女史にして若し眞に「人生」を愛し、「人」の子の爲に身を教育に委ねんと欲せば、何ぞ彼の社會寄生虫養成所に赴くの愚を學ばんや、平民子女教育の廣野は古來久しく荒廢に遺棄せらる卓越せる人物に非ずんば到底此荒野を開拓する能はず、吾等は安井氏が特に有爲の才を懷けるを聞きて、其貴族遊食人の伴侶たらんとするを惜む者なり。

▲金子喜市氏より（北米）

唯今久しぶりに「世界婦人」第二十五號拜見、相かはらず、盛んにおやりの由、但し此號は殆ど石川君のクロポトキン論にて全紙をうづめたるは恰も日本には婦人問題がないかの如く見へて、淋しくもあり、心細くもあり、予は「世界婦人」が日本の女性覺醒に全力をそゝがれんことを望む、クロポトキン崇拜や、バークの社會論などは寧ろ迂にすぎたりと思ふはいかゞ乎……小生は、ホーム及び雜誌社を今月より左記に移したれば交換雜誌及び御通信一切は左記に乞ふ。

The Socialist Woman,
Girard, Kansas, U.S.A.

▲宇都宮卓爾氏より（東京監獄）

獄中生活も馴れては餘り辛くも思ひませんが、唯だ娑婆で滿腹主義を逞うした報いは覿面にお腹の減るには少々閉口です▲運動が一日一回ある、この短かい三十分の間が僕等が最も愉快な時なのです▲昨日の朝、運動に出た時は、前栽の籬に朝顏が五七輪、露を帶びて咲いて居た、瑠璃を溶かしたやうな大空にはミルク色の雲が二三片悠る〳〵飛んで居た、自然は實に美はしい、自分はこの美はしい自然に背いて、陰鬱な獄房に囚はれ、思ふまゝに自然の寵兒たることが出來ない、嗚呼あの黑ずんだ煉瓦塀の外でこの花を見、空を仰ぐのは一年の後か、二年の後か、また三年の後か……▲世界婦人の隆盛を祈る。

▲大須賀里子氏より（東京監獄）

過日來石川兄始貴姉の御厚意難有候、御厚禮申上げます、御かけ樣で四人共に無事で居ますから何卒御放念被下度候（七月廿九日）

久しく御むさた至しました、皆樣御變りありませんか、過日は御目にかゝらない樣でしたが、御變りはないですが、御案じ申上て居ります（八月十九日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

○萬國婦人大會

△去る六月廿六日の英國『勞働指導者』新聞に記載せる一通信によれば、アムステルダムに於ける萬國婦人大會は大なる成功をなせり、其通信左の如し。

△集合せる婦人は殆んど全世界の各地より來れりき、予は是迄、機織工女或は社會主義者の大會等に幾度か出席せりと雖ども、未だ曾て此會合ほど活動の精神に富めるものを見ざりき。

△集會せる婦人は皆奮激と熱誠とを以て充され、又、充分なる能力を有せり、獨逸人の大多數は社會主義者なりき、露國人及び芬蘭人は露國の革命運動家なりき、ボヘミヤ及びブルガリアの婦人も亦革命主義者なりき。

△彼等は皆社會主義を歡迎する者なりき但し、談適々獨逸社會民主黨の事に及ぶや、獨逸の婦人が其肘を振りたるは例外とすべし、是れ蓋し獨逸社會民主黨が婦人に助力せざりしを以て也、之に反して吾獨立勞働黨の事を聞くや、彼等は非常に喜びたり、吾等亦た吾黨の眞事業を語りて以て大に自ら誇るを得たり。

△最後の晩、即ち獨逸人主催の晩餐會席上に於て、芬蘭に對して同情の意を表し、同國人の自由に打擊を加へたる露國皇帝に對して侮辱を加へんとする動議提出せられ、會場爲に憤激の氣を帶び來り、氣高く美しき芬蘭代表の一婦人立ちて其紅の唇より皇帝暴壓の實情を述ぶるや、滿堂水を打ちたる如く靜まり、彼女が沈痛悲壯なる演說は全會員をして深く奮激せしめたり、されば吾等は之に答て、此に會同せる十八ケ國十萬人の婦人を代表せる吾等婦人は、今後、何れの處、何れの性（男女）を、問はず、其自由の爲には共に起つて協力して奮鬪すべし、と言へり。

△以上は一婦人報告の大要なり、吾等は之を以て西洋婦人の雄大なる運動に今更ながら羨艷たらざるを得ず、而して西洋の社會が既に社會主義成就の期、婦人自由の完成期に近きたるを察知せざるを得ず、翻つて我國及び東洋諸國の形勢を觀れば社會の動搖は漸く其根底に及び、革命の機運は亦た漸く切迫せるものあるに似たり、知らず婦人諸君は果して自ら其準備ありや否や。

○英國曼市に於ける婦人示威運動

去る十九日のことなり、大示威運動はマンチエスターのヒートン公園に於て開かれ、折しも好天氣にて、非常なる成功を收めたり、運動の煽動的なる、演者の熱誠なる準備の行屆ける、蓋し此く成功せる所以なり、民集甚だ多くして計算すべくもあらず新聞紙は各々見當違の記載をなせり、『デイリーニユース』は一萬二千と算し、『マンチエスターガーデアン』は五萬と穩當に出で『マンチエスター、アイリーデスパツチ』は十萬と傳ふ、民集は睦まじげに忠恕ありげに防害者と講演者との間に、惡氣なき諧謔を交はしたるに止まれり、演壇は十三ケ所に設けられしが、例のパンクハースト夫人クリターベル、パンクハースト孃、ガウスオープ、アンニーケンネー孃等は、主なる中心點となりて衆を引きゐたり。かくて何れの演壇に於ても、目下ホロウエーにある四人に同情を表すること、及び男子と同等の條件を以て直ちに婦人に參政權を與ふることを政府に促すこと等の決議は大多數を以て採可せられたり。

○英國の婦人勞働協會

英國の婦人勞働協會は迅速に發展して居る、シム夫人の敏腕なる統卒の下に、續々急速に新支部が北東地方に發生しつゝある、グラスゴーに於ては既に一支部を生じ、又、鐵道婦人組合は其の年會に於てこれと聯絡を取る樣に決議した婦人勞働黨の組織問題の起た時、それを考査するために先づ第一に委員を召集したのは此鐵道婦人組合であつた。

されば婦人勞働協會は此の强大なる味方の加勢により益々强大となるべく、殊に選擧運動に際して然るべしといふ。

○社會主義と平和

ベルリンの社會主義者等は一大平和主義示威運動を開いた七月十七日發行の社會民主黨の機關紙『フオルウエルツ』は、其表面に全日夕方開かるべき示威運動に馳せ參ずる樣にと、勞働者招待の大々的揭示をやつた、晩八時には同時に三つの會合が市の三ケ處に別々に開かれた。

レポウルとルーバイルは其の主なる辯士であつた、彼れ等は、國民の愛國心を激發し、モロツコ問題にモツと强硬に干涉せよと大臣等に迫る『エロープレス』のやりくちに反對した演說は非常な感激を以て迎へられ强硬なる決議はどの會合でも大多數で通過した。

○新地蘭婦人が倫敦を見て

グロツスマン夫人は雜誌『十九世紀』中に、ニユーヂーランドの一孤客たる自分の眼に映つた、ロンドンの、暗慘たる光景をば描寫してゐる。

夫人は所謂ロンドンの裕かなる紳士淑女が『穢臭くるしい襤褸を下げ、犬も喰はない屑肉を食ふ』所の貧乏人の困苦に對する無情冷酷に憤激したのである。

『裕福なる英國人の中には人格下劣なる男女の見るから嘔吐を催す樣なのが澤山居る』と彼女は述べて居る、それは野蠻人にも劣る、野蠻人と雖もその動物的本能の狂暴を補ふに足るだけの元始的道義を守つてゐる然るに此國の墮落は物質的文明の溢れ水で育つた特別なる墮落である。

○叛逆の陰謀

去月十四日の電報に曰く、多數のクロシア名士及びボスニアの暴徒六七名セルビア統一運動に連座して逮捕せらる右はモンテネグロ及びセルビアの援助を借り希臘スラーブ共和國建設の目的を以てクロシア及びボスニアに對し反旗を揭げんとしたる陰謀發覺せるが爲なりと、土耳古の叛亂が其眞正なる革命の目的を達せずして漸く鎭壓せらるゝが如き形勢ある時に際して、東歐に此事あり、吾人は東半球の中部に於て、世人豫想外なる革命熱が下層民中に深く燃え居るべきを想はざるを得ず、

○不景氣と勞働者

北米華盛頓移民調査局の報告に據れば、歐羅巴よりの移民は本年六月三十日迄即ち上半期に於て十萬三千六人なり、昨年の同半期は七十八萬六千六百六十七人にして本年は七割五分の減少を示せり、以て如何に一般の不景氣が勞働者に大打擊を與へたるかを見るべし、不景氣は是れ私有財產制度、自由競爭制度の特有なり、而して多くは資本家の我慾より生ずる現象なり、然も景氣好くば資本家自ら奢侈をなし、不景氣なれば勞働者を壓迫す、今の世は到底勞働者の頭を揚ぐる能はざる世なり。

○土耳古の改革

君斯丹丁府の諸新聞は去月中旬に政府の改革案なるものを揭載したるが、其主要なる點は新政治と兩立し難き各法律規則は一切之を變更すること陸海軍を改造すると、回敎徒たらざるものと雖も軍務に服せしむること及び列國との關係を親密にすること等なりといふ、而して今や既に國會議員の選擧も開始せられたりと云ふ。果して然らば吾等の先きに氣づかひし如く、其改革は僅かに憲法的改良をなせしに過ぎず、立憲代議政治が既に明白に其失敗を世界に告白せる今日に於て此新進國が再び其轍を履まんとするは惜むべし、而して吾等は今日より豫言することを得べし曰く、近き將來に於て更に第二の革命は爆發すべしと、蓋し、私有財產制の上に立てられたる代議制度は明かに其組織自身の中に革命の禍根を存すれば也。

○波斯革命軍の活動

本月一日の電報に曰く、新知事エインネドウレ氏はタブリツ市を砲擊するの意あるを發表し同時に歐米人に對して市外に退去すべき旨勸告したり氏は革命派の兵士五千大砲五門に對し兵士三千、大砲十二門を有し居れり但しタブリツの如き堅城を防護するには五百の兵士あれば充分なるが如し、と吾等は革命軍が須らく堅忍持久の策を樹て、ドコまでも其大目的に到達せられんことを望むや切也。

○北淸の馬賊　●●●●

去月三十一日の來電に曰く、昨今馬賊の出沒甚しく今朝も滿鐵顚覆の目的にて昌圖附近の線路を外しあるに氣付かず長春よりの列車之れが爲め顚覆して負傷者ありと。

▲謹告▼

從來讀者より購讀料御拂込に際し他の雜誌社を經て御送附下さる向も少からず爲に計算の混雜手數を多くするの困難あり希くは今後は可成本社へ直接に御送附の程願上候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教育？（中の上）

（附女教師論）

小野吉勝

一

予、自ら省みて其智と德との足らざることを知るや深し。他或は時に誤りて予の價値を過重することあらむ。されば自家の無智と不德とは何人よりもより多く之を認むるを奈何。

吾人亦教育に「經驗」なし。「經驗」なき者の教育！、授けらるゝもの、迷惑、豈に測り難からむや。さなり「經驗」は教育家に取りて缺くべからざる一資格なり。此點に於ても吾人また資格に缺くる所あり。

二

吾人茲に告白す、予の黌門に游ぶや未だ嘗て教授法の如何なるものなるかをすら學びたることなく、生徒の統卒訓練上の一注意すら聽きたることなし。唯朧氣に覺えし慣用語は、曰く「憲法」、曰く「國家」、曰く「行政」、曰く何と。此内片言隻語の「教授法」に就て記すところなし。

吾人「智」に足らず「德」に足らず將た「經驗」に絶無なり。然らば果して如何にして克く我が胸奥の仄かなる歡喜の影をして濃く豐ならしむるを得るか。

三

吾人窃かに思ふ「經驗」は「教育家の資格の凡てなりや」と。この僭越なる「疑」の兆しは敢て頭を擡げ初めぬ、漸て我が心の底にその根を堅く下ろしぬ、我が胸奥の張目數顯の童子は「否」とばかりに横に頭を振りて「經驗」に絶對主權表彰の王冠を捧ぐるを拒み、且叫んで曰く「懼るゝ勿れ、進に往つて汝自身の「誠を」盡せ」と。

予、大に動く。乃ち童子の言に欣び從ひ往いて「教育」の門を叩く。門扉堅く鎖して容易に開かず。我が勇る心は先づ失望したり。爰に意氣沮喪したる失望の予は、蹶いて上よりの力を祈りぬ。乃ち再び起つて全身の力を籠めて之を押せば、案外！今まで儼として堅きこと巖の如かりし門扉は音もなく我が前に開かれむとは。

爰に於て乎知る、初め門扉の儼乎として些の手答へなかりしは、我が心の奥底に「疑惧」の念の潜み居て、いつとなく後髮を引けりしが爲めにして、後その容易に開かれしは我が「覺悟」と「信念」との「疑惧」に克ち得て、躓きの躊躇はてゝに邁進の姿となりて現はれしが爲めなりしを。

確信よ、確信よ、世にこれ程の力強き何ものかある。

四

我れは歡喜に溢れつゝ遂に「教育」の門内に驅け入りたり

尋で予は左方に當つて其影朦朧として凝視すれども、頓に捕捉し難き紅欄白堊の殿堂に向つて只走りに走り行きぬ。圖らざりき、こは是れ「女子教育」てふ一構へならむとは。

多謝す、さらば我が努むべき唯一の道は何ぞや。

五

世に無智ばかりあはれに悲しきはなからむ。されば、之れがために世は競うて「智識」と「技能」とを授くる、否寧ろ詰込むに急にして「信念」の涵養を忘れたるもの、如し。

凡ての學校には倫理科目あらむ、あるべき筈なり、倫理學者亦あらざるべからず。借問す、かくの如くにして能く何程の効果を収めつゝありやと。不德無經驗の吾人、世の大家先輩に對つてこの僭越の言を爲す其罪輕からざるは、予能く之を知る。知りて猶且敢てこの質問の矢を放たざるべからざるに至る、我が心抑も狂せるか、世果して是なるか。

德育養成に於て首腦たるべき倫理教育すら斯の如しとせば、他は推して知るべきにあらずや。學校教育は宛然「智識」の切賣店の觀あり。その本末を顚倒せる教育に何程の權威ありや光耀ありや。

予が不才を省みずして敢て至難の「教育」に與はりしもの、唯この一點「信念」の涵養を鼓吹せむとの已みがたき願望に刺戟せられたれば也。

吾人が努むべき唯一の道は則ち是れ。

六

嗚呼何すれぞ世は斯くまでに「眞摯」の面影を滅却せる？。

『身を以て衆生を率ゐよ』とは予が彼の紅欄白堊の殿堂に入る當時の覺悟なりき、而して今猶然り。今後猶且然らざるべからず。されば予は身をも骨をも惜まず唯默しつゝ一生懸命に働けり、手の届く何事にても、心付きたる凡ての事に。假令そは不慣のために「氣が利いて間の拔けたる」事は多々ありきと雖、我が全力の誠を盡したることは吾が神これを知し召し給へり。

七

而かも予が一級の主任となるまでは其効果や茫々漠々、雲を把むが如く散没に失したるの憾なきにあらざりしも、其後或級の

而かも八十何名を有する一級二組の主任となりてよりは、予がその級に對する熱愛努力は殆んど極度に達し、予が素懷信念修養の鼓吹、謙遜努力の奬勵は稍身を以て示せしものありと雖、素修養到らざる一介の書生の身、思うて未だ到らざるもの多きを奈何せむ。

而かも吾人は、この短期間に與へたる感印象、與へられたる實經驗を顧みて、轉た歡喜の微笑を禁ずべからざるものあり。

多謝す、吾人の努力は決して徒事にはあらざりき、

さらば今後の經營は如何？。

八

吾人は「教育乎否乎」一篇を作し、今日所謂隆盛なりと稱せらるゝ學校教育の、滔々として「智識」の注入に止まり、一個の人間たる「信念」の開發を閑却せる事實を慨し、茲に所謂學校教育の効果に疑を生じ併せて予が見たる「女教師」なるものに就いて所見を述べて大方の是正を乞はむとして端なくも先づ自己の經歷と所信とを明かにするの必要を感じたれば、稿を改めて本題「教育？」を擇びぬ。

而して今やその經歷と所懷とを畢述したれば、いでや之れより「女教師」てふ一階級に對する卑見を述べむ。

但こゝに一言先づ斷り置きたき事こそあれ。吾人素、一班を知つて全豹を窺ひ得るの智者にあらず。且人には夫々趣味の相違に從ひて其眼鏡の色を異にせり、是れ當然の理なり。さらば予が用うる色や何？、紅か白か將た綠か。

遠眞是非の論は他評に任せむ、詩に曰ずや「自家の妍醜は自家知る」と

最初の敵

草田會作

常人が嘗て幾回か言はんと欲して、猶も言ひ能はざるものを、スタンダルは最も大膽に最も眞率に而も最も赤裸々に喝破して曰つた。『吾々人間が此の社會に出るや、最初の敵となるものは即ち親と主人である、然り親は子の敵である、主人は婢僕の仇である。若し諸君が眞に正義を愛し、眞に自由を欲するならば、乞ふ先づ彼の親と主人てふ最初の仇敵を斃せ。』

世人の多くは、必ずや此のスタンダルの言を以て、徒らに矯激の辭を弄し異端の說を喜ぶものと爲すであらう。そして極力排斥非難するに違ひない。

けれども靜かに考へて見ると、矯激とも異端とも思はれる此のスタンダルの言で、強ち一顧の價値がないでもないと云ふ事が判る、否な世人が今、虚榮の眼を閉ぢ偽善の眼を醒めて此のスタンダルの言に對するならば、直ちに彼れの說の寸毫も誤りなきを知了するであらう。

凡そ今の世の中で何が一番惡事かと云つてかの金錢の威を藉つて猥りに他人を抑壓束縛する事程大なる惡事は外に無いのである。

今日、富豪や貴族てふ權力階級が、多數の平民勞働者から不倶戴天の仇敵視されるのも、又女子が近來頓に男子の手から、其身を脱出するの目的に向つて、專心努力するのも、畢竟皆な之れあるが爲めに外ならないのである。

却說、吾々を生んだ所の親は如何、吾々を日夜使役する所の主人は如何、金錢の威を藉りて吾々子弟を抑壓する事はないであらうか。束縛する事はないであらうか。

遺憾にして萬が一にも、彼等が金錢の威力を以て其の子弟に臨むと、比々として皆な然らざるは無しと云つた樣な形跡が、少しでも在た時には、其時には何としやう？スタンダルの言は、左程に矯激でも異端でも、なささうな樣な氣がしてならぬではないか。

然り彼れの言は、決して矯激でない、異端でない。前にも一寸述べた如く、冷靜の頭腦と公平の眼光とを以てさへすれば、彼れの說は寧ろ凡中の凡說たるとに、スグ氣が付かねばならぬのである。

於是乎予は切に思ふ。『惡に抗するのは即ち善の始めにして亦終り也。惡を知て盡さゝるは善薄き也、義を見て起たざるは勇無き也。』と。

終りに予は、スタンダルに代つて繰返して曰ふ。『諸君にして眞に、眞の自由と眞の平等とを欲するならば、乞ふ先づ親と主人とに對つて、速かに反抗の擧を擧げよ。』（畢）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

人間録（二）

白　女　人

△總て幽玄なるものは、崇高也。蒼天、爲めに崇高に洋漠爲めに崇高也。哲學が百科の王たる全く是がためのみ。

△實在の世界を空なりと斷せし釋迦は斯くて多くの人に尊まれたり。耶蘇も亦然なりし。

△彼等實に人の子を賊する人間界の惡魔也彼等實に人の子を向上せしむる人間界の師表也。此兩極端を兼ね有する者にして始めて釋迦たり得可く、基督たり得可し。

△正直者は遂に能はず、一人を服せしめ得可し而かも萬人を得可からず、況や世界を擧げてをや。

△陰險者の小なる者は身を亡し同時に亦名を失ふ。陰險者の大なる者は身と名とを二つながら亡失せず其名を得て身を滅すものは未だ至らざるもの也。此の如くして釋は耶より大也。

△『主義は廢物也とは』余曾つて之を謂へり、茲に『學問は死物也』と謂はん。平凡他事なきの社會に於て學問は其醜を曝む、然らずんば其醜を蔽ふ。學術に溺れそぼつのごき衣は殊にうるさく、更に悲し。火に近附くのとき身を燒くの媒介となる危ひ哉。

△學術に惑るは文明に衣食する也。宗教に據るは衆人に溺む也、富貴に依るは社會に待つある也。信仰に生くるは空想に呼吸する也。生死の趣味に馳騁する者のみ獨り『人』其者に生く、之れ人間の至境、眞人也。

△生死の趣味を觀照し得る者、其中に眞あり、善あり、美あり、而して此三者は渾然として一身に玉成す。彼れ其の詩を生み眞の人間界に逍遙す。

△眞人は必ずしも社會と交通せず、必ず宇宙と貫通す。高揭して天に入るは眞人の夢也。飛散して沈み去るは眞人の終り也。夢に動じつゝ、飛散に終る之れ是を凡人の生涯とは云ふ也。

△世に眞人に近き者二あり、生れて因習を役らず、哲學を言はず。靜止すれば默としてさながら石の如く、發動すれば恰も風の如きは其一也。あらゆる因習を離脱しあらゆる智識に訣別して生死の堂に安ずる者は其二也。第二者の來止亦第一者に似て更に確か也。前者を『白痴』と名附け後者を『狂』と呼ぶ。

△曲線の美を示すものに、雲烟あり。

△戀には趣味の複雜なるもの也。中に苦樂の兩境を備へ、狂愚の二面を具す。

△戀を得るは同時に失ふ也。得ざるは遂に失ふこと無し。

△戀を得るとは、戀を止むること也。得ざるとは永遠に戀すること也。

△暗黒は『目の人』の權威を有ふ。彼れ故に恐る。大風雷は『耳の人』の權威を有ふ、彼れ爲めに怖る。恆に恐怖なきは眞人のこと也。

美代ちやん

渡邊　博

一

涼しい風を身に浴びて、自分は飄然と表へ出た。

陰暦七月十五夜の月はもう、庭の並木の梢を離れ懸つた所で、際涯もなく澄み渡つた光線は、野と謂はず、山と謂はず、田の面に降く稻葉から、さては松並木、面白う唄ふ子の無い家まで、隈々と照らすのである。

表へ出た自分はあゝと深いそして爽い呼吸をして、何くともなしに、丸い月影を慕と見上げて瞑想に耽つて見る、何處からか草笛の音か、蜩か、と聞えて來る、高く澄むだと思ふと低く穩かに流れて往く、低く穩かに流れ往つたかと思ふと、今度は亦も高く澄むで御空に消える。

自分は何時か此の音の音に暫し吾を忘れて、月下に流涕した。やがて衣擦れの音やら、下駄の響やらが、背後に迫つたので、自分はハッとして顧首て見ると、それはお隣の美代ちやんであつた。美代ちやんは今年十三である。白地の浴衣の袂を、ぶら〳〵と涼風に翻らせて、紅の帶を縮めて居るまだ春知らぬ少女である。元來知り合つてゐる間なので、美代ちやんは自分を見て打笑むで挨拶された。「今晩は」と自分も挨拶して何處へと訊て見ると、美代ちやんは「滿ちやん」とこと言つて往つて仕舞ふ、悠然とした白地浴衣のうしろ姿が、月の光りに照らされて、愛らしくも亦美しい。

滿ちやんは美代ちやんの學校お友達である。愛らしい美代ちやんの姿が一足毎に小さく〳〵成つて往くのを好奇の眼で見て居た自分の頭腦には、母の話しが浮かんで來た。

二

それは今朝の事である。

自分は顏を洗うと例日の通り勝手口から、井戸端へ往つて冷水摩擦をやつて居たら、何だか隣家で、人の喧しく聲やら、物を打つ音やら、さては女の泣聲がする。聞いてよく耳を澄して聞くと、泣聲だけは、間違う方もない美代ちやんの泣聲だ、自分の井戸端から隣へは僅か半町足らずであるから、手に執る如く騷動が聞える。中にも美代ちやんの泣き聲だけは、悲しい切ない思ひの聲のやうで自分は心臟を刻むで刺されるやうに感じた。

「何うしたんだらう」と再び耳を澄す途端「是でもか是でもか」と癇走つた女の聲がする「美代ちやんの母さんが亦虐待するんだな」と自分は思はず拳を握つた、が、凝としても居られないので、自分は早速炊事をして居た母を呼んで「美代ちやんが可哀相だから往つて見て下さい」と謂つた。

「人よりも慈悲深い母は眼の色を變へて、勝口から、アタフタと鄰へ驅けて往つた。

結果は何うであらうと多少懸念もするので、尙ほ暫時鄰の狀態を見て居たら、母の說き伏ふ辭やら、是に對する繼母の聲やら聞える、けれど美代ちやんの、悲しい泣き聲は相變らず、深々と朝の涼しい空氣を傳ふて聞えるのである。

耐えがたい悲哀と、限り無き幽愁に閉された、自分は細き腕を拱して歎と口脣を嚙だ

三

「一體何が原因なのです」自分は母の歸斯う訊いて見たら、母は聲を低くして、

「ナーニ、不憫ない事だよ」

「けれども、可笑しいぢやありませんか、美代ちやんが鄰の繼母の謂ふ辭を諾かないつて子ぢやなしさ」自分は何うしても頭に落ちないので、重ねて訊いた、

「話せば種々譯があるがね」母は一寸句を逡つて、

「まだ、この事は誰も知るまいがね、お芳さんは美代ちやんを藝妓屋へ賣るつて謂ふ話しだよ」

「エッ、妓」自分は事の意外なのに愕然として反問して見る、

「あゝ、そうなの」母は何か語を次いで「それでもう藝妓屋の方は取極めてあつて、美代ちやんは今朝お芳さんが伴れて往く手筈で髮も結はせれば、着物もこしらへたのだが、肝心の美代ちやんが厭なので……そりゃ何方かと謂へば、お芳さんが餘り自分勝手さ、何しろ自分の子が出來たからさて、先妻の子を邪慳にして、藝妓なぞに沈めて、自分許り好いものを喰べたり着たりするのは理に外れてゐるよ、可哀相なは美代ちやんさ」

「夫で源さんは何の故障もしないんですか」

「源さんかへ、駄目さ、あの人も始終お芳さんには敷かれて居るのだからね」

是を訊いた自分は、芳ちやんの父源さんの無骨なのを齒痒く思はずには居れなかつた、男と謂ふものは、そのやうに女に懸けては眼の無いものであらうか、勿論自分に近男の片割であるけれど、一にも二にも女房に鼻毛を讀まれる必要はあるまいと思つた母は暫く黙つて自分を見て居たが、突然口唇を切つて、

「源なども附うだよ、若しかお前のお父樣が健在で居て、私でも亡くなつたものなら、何處からか後妻を貰うか、それとも、性根の知れない化物を連れ込んで來るか知れやしなかつた、そうするとお前等も美代ちやん見たいに年季小僧にでも叩き込まれる事だつたらうが、幸ひ私が達者で斯うやつて居家を通うして居るので、無事にその日を送ることが出來るのだよ」母はホンの子供にでも言ひ聞かす如く、斯う謂つて、勝を下げて、勝手口へ立つて往かれた。

跡に一人、ツクネンと茶の間へ殘つた自分の眼には熱い〳〵涙が湧いて來た。

四

俯いて歩を移す自分の足は何時か美代ちやんの跡を辿つて居る。

「あゝ、藝妓などに賣られるのか、可哀相に」と自分は今朝の悲劇を思ふと、悄胸がふら〳〵として、丁度萬斛の石にでも壓せられるが如く、頭の芯でも自然と鈍くなる許り

引切りなしに田の面を渡り來る涼風はそよ〳〵と、頰筋を撫でるので、物の小半時も經つた頃は、何うやら胸も涼しく、頭の重みも、減じたかと思はれた。

月は益々冴えて、今まで耳に這入らなかつた、蛩の音が亦も劇然と響いて來る。自分は詩吟の語も靜かに、歩を運ぶと、對うから美代ちやんと滿ちやんとが肩を揃へて何か密々と話しながら、やつて來た。通りすがらに自分は窃々美代ちやんの面を見た今朝の想像がまだ心の中に描かれてあるので、その笑顔も何となく寂しい。

寂しい美代ちやんの面を見た自分の胸には亦寂しい芽が生えて胸がやゝ重くなつた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社會民主々義の大成者
カル、・マルクス(三)

石川旭山

資本論梗概(續)

△第一 價格論

マルクスは有ゆる資本……貨銀以外の一切の產業上の投資……が絶對的に價額を生せざる者なるとを主張す、故に通常利息と稱せらる資本家の所得も、彼は之を不正として是認せざりき。凡そ此の如き資本の根原的價格……材料、器具、食物、及び機械の損料等……は、生產物の價格中に移し來り、生產物の價格中に含有せらる、而も之を移し含有せしむるものは勞働其物を措いて他に存せず、古き價格は勞働に依て保藏せられ、新なる價格は勞働に依て附與せらる、故に利息は全然此點より離れたる報酬と言はざる可らず、普通經濟學者の說く所に依れば、資本其物が生產不可能なる如く、勞働其物も亦た生產不可能なるは明かなるが如し、然るにマルクス之に答へて曰く、勞働と資本とは新貨物を生產するに共に等しく缺くべからざる要素なりと雖ども、新價格を生ずるは唯だ勞働なり、蓋し價格は之に應ずべき勞働を含蓄するなり、價格は勞働時間の相當記號に過ぎざるなりと、斯くて彼が全體の主張は價格の性質に關する彼の根本主義の上に歸着する也、故に吾人は其根本原理に就て少しく精密なる討査を施さゞる可らず。

然らば價格とは何ぞや?、マルクス考ふらく、此問題に關する大なる誤謬は、價格と効用若くは價格と市價との混同より生ずと、而して彼は此二個の思想(効用と市價)より價格を區別するは是れ彼が經濟學に寄與すべき大なる功績と思惟したり、彼はアダム、スミス以來の使用價格と交換價格との區別より說き起し、而して交換上の貨物の價格を使用上の價格より獨立せしむるに於て、スミスと一致したり、水は使用上に大なる價格を有すれども交換上には價格を有せず、ダイヤモントは交換上に大なる價格を有すれども、使用には甚だ少なし、故に使用上の價格は所謂價格に非ず、効用なり、然れども、マルクスの說に從へば、交換上の價格も亦た嚴格に言へば價格に非ず、唯だ現代社會の下に於て價格が表示せらるゝ形式に外ならず、各家族が其需要を充さんが爲に貨物を生產したる原始社會に於ては交換と云ふことあらざりき、而して共產社會に於ても亦た交換(社會的事業としての)といふこと有らざる可し、蓋し其時の交換に於ては、其交換當事者は各々平等なる一私人として自己生產物の所有者として立つものなれば也、而して交換の存せざる所には交換價格存すると能はざれば也、然れども原始的時代に於て總ての物件に價格の存せず、又た共產主義の社會に於て價格の存すべきとは疑ふ可くも非ず、但し其價格が如何なる形式を以て表示せらるゝかは自ら別問題なり、然るに吾人は有ゆる物件が交換の目的を以て造らるゝ交換的社會に生活するが故に、吾人が價格を實驗するは唯だ交換の場合に在り、從て吾人が價格の性質を研究するも亦た唯だ交換の事實を討査するに過ぎず。

然らば交換上の價格とは何ぞや?曰く一種の有用なる貨物と他種の有用なる貨物とを交換する場合の比率是れなり、マルクス曰く、此比率は各種貨物の効用如何に係はると無く、又は如何なる要求を滿足せしむるの資格を有するやに係はると無し、何となれば、第一に價格は分量の比率なるに此場合は性質の問題なれば也、第二に二種の異りたる効用は共通の度量を有せざるが故に比較すると能はず、然れども、價格は比率なれば、自ら比較てふことを含有す、而して比較は自ら共通度量てふことを含有す、胡琴は音樂の嗜好を滿足せしめ、麵包は饑餓を滿足せしむ、然らば其如何程の音樂的滿足が如何程の饑餓の滿足に相當すべきか、誰か能く之を計算し得る者ぞ、然れども其各種の要用の意義に依らずして此麵包と胡琴との價格を比較するは不可能の事に非ず、第三に用途ある貨物にして何等交換上の價格を有せざる者多し、例へば空氣、水、未開墾地是なり、故に價格の附隨なる交換に就て論せんと欲せば吾人は其問題なる貨物の効用の觀念を棄てざる可らず、然かせんか其跡に殘る所の性質は唯だ一にして總ての貨物が共通に有するものなり、而して其價格の存立する所は其唯一共通の性質の上に在り、其性質は即ち總て勞働に依て生ずるなり、吾人若し貨物の効用を觀察せんか、其種別の多きと無限なり、然れども吾人は其總てを一團として之を單一なる性質に約するとを得べし、即ち其總ての貨物を同一の材料、勞働より出でたる種々なる量積として見るとを得べし、混雜は消散す、最早卓子、倚子、家屋等を存せず、唯だ各物々々に保藏する人類勞働の分量を有するのみ、而して其勞働其物のみは差別を存せず、是れ木工勞働に非ず、石工勞働、機工勞働に非ず、唯だ單に交換的貨物に凝結せる抽象的にして無形なる人類の勞働あるのみ、交換貨物には勞働汁(種々なる物を分拆すべからざる程に煮詰たる汁に譬ふ)の分積あり、而して其貨物は各箇に用したる勞働分量の比率を以て交換せらる●

然らば價格とは抽象的勞働分量なり、

然らば勞働の分量とは何ぞや?、如何にして之を決定し得るか?勞働とは作業に關する人類自然力の活用なり、而して勞働の分量は其繼續の時間[illegible]、故に勞働の分量は其繼續時間に約せらる、即ち勞働の分量は時、日、週等を以て計算することを得、此に於てマルクスは定義を下して、價格とは勞働時間に對する貨物の比例的關係なりと云へり、而して交換の秘密は即ち一定時間の勞働は常に同一價格の生產を繰返すてふ點にあり、されば價格は貨物が未だ市場に出されざる前に之に附着せる既成物なり、從て市場の狀態には關係を有せざる也。

マルクスは價格の要素を勞働時間てふ單一標準なる要素に約したり、而して効用てふ要件と市場の状態とを其成立要素より除外したり、然れども之を除外する前に於て既に變装せる形式を以て此等の要件を採用せり。

第一 に若し一定時間の勞働が常に同一價格を生產すとすれば、一週間に一個の外套を作り得る怠惰なる未熟なる職工が、同一時間に六枚を作り得る敏捷なる職工、又は機械の助力によりて二十個を作り得る職工と、同額價格を生產すと言はざるを得ざる可し、如何?マルクス答ふらく、價格を量定する所の勞働時間は事實上の時間に非ず、唯だ現在の社會狀態の下に於て一定の貨物を生產すべく必要とする時間に就て之を量定するのみ、即ち其時代が提供する所の手段に依る平均的効果を見積り而して其勞働時間に就て其價格を量定するのみ、約言すれば彼の所謂社會的必要勞働時間(Socially Necessary time of labour)に就て量定するなり、價格とは社會的必要勞働時間に對する內包的關係なり、さればマルクスの立脚點は到底單純なる勞働分量の一點にあるに非ず、即ち此外に、產業の種々なる部分に於ける勞働の平均生產力てふ觀念をも之に附加せらるゝ也 マルクス曰く「貨物の價格は直ちに[illegible]せん、而して逆轉して生產力[illegible]ず、固より其貨物を實現せしめたる[illegible]生產力[illegible]と、故に吾人が其貨物の價格を知る前、吾人は先づ之に[illegible]せし勞働の分量と其勞働の生產力とを知らざる可らず、吾人は產業の種類に依て其分量を計るとを得、然れども如何にして平均生產力を一定するとを得るや? 唯だ一定の作業に從事する全勞働の總生產を一定し、而して各勞働者の平均量を測算すべし

ダイヤモンドは地表に存すると極めて稀有に屬す、故に之が搜索者は數日數週間を費して一個をも發見せず、僥倖と非運とは之を並び受けざる可らず、換言すれば一ダイヤモンドを生產するに社會的に必要なる勞働時間は頗る高度に達す、從て其價格も之に伴ふ可し、豐年の麥作は凶年の其れに比すれば同一勞働にて二倍も多き生產を見るとあり、其生產力は大なりとすべし、其麥作勞働の社會的必要時間は甚だ少なし、而して麥一升の市價は下落すべし、故に貨物の價額は其產物の多寡に係はると言ふ可し、其自然力に因ると、機械力に因ると、人の熟練に因ると、其何れなるを問はざるなり。

第二 然れども若し價額が單に勞働の分量に應ずるとせば、從て次の結果を生ず可し、勞働を費さゞる物は價額を有する能はず、勞働を費せし物は價額を缺くと能はずてふ事即ち是なり、此二問題に關するマルクスの解釋は精細に注意するの必要あり蓋し是れマルクスの主張の根本的誤謬を明瞭に發露す可ければ也、マルクスは之に答ふるに、先づ價格と市價との區別より說明を初めたり、勞働を費さゞる物件も市價を有するとを得べし、然れども價格を有すると能はず、未開土地(處女地)の如き即ち彼が此種の物件中に數ふる所なり、(次面へ)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

少しの勞働も此等の物件に及ひしと無く、此等の物件は社會的必要勞働時間に對して少しの內包的關係をも有せず、從て如何なる價格をも有すると無く、又た能はざる也然れと此等は一の市價を要求す、處女地も實際に市場に於て賣買せらる、從て其物件自體は何等の價格を有せざるに係はらず、之に依て價格を有する物件を購求するを得べし、然るに此價格と市價との區別は總ての問題に通徹する能はざる可し、蓋し、マルクスも是認せる如く、市價は價格の一形式に過ぎざれば也、マルクス曰く、市價は價格の貨幣的形式」なりと、即ち市價は貨幣を以て表示せられし價格なり、即ち貨幣と貨物との交換價格なり、然るにマルクスの言に從ひて未耕地は市價を有するも價格を有する能はずとせんか、未耕地は貨幣を以て計算し得る所の交換價格を有すれとも價格を有せずと論結せざる可らざるに至る、然れどもマルクスは唯だ交換の現象より出發せり、彼は言へり、今ま吾人の綜覽する價格の形式は唯だ交換價格あるのみと、而して彼は遂に事實と遠かれる所の價格の理論に到達したり、彼若し、或る物件は價格を存す、然れども交換價格を有せずと主張せんか、其說明は困難とならん、彼若し、或る物件は交換價格を有す、然れとも價格を有せずと言はゞ、彼の說明は矛盾を生せん、尙ほマルクスは、貨幣を以て價格を計算する標準として充分に精確なると記せり、而して更に貨幣其ものが價格を有せざれば其職務を盡すと能はずと言へり、換言すれば總ての目的に應當する所の性質、即ち勞働による產物たるの性質を有するに非ざれば貨幣は其用を盡す能はず、されど彼は處女地(未耕地)を以て其性質を有せざるものと爲せり、故に其性質(勞働による生產)を有する物件と相應當すべからざるに至るべし、然も事實上、日々貨幣を以て評價せらるゝなり、要するに是れマルクスが推論中の一種の矛盾と稱するを得べく、而して是れ彼が「効用(Utility)は勞働に賴らずして價格を賦與す」てふ議論を非認せんとせしに基くなり。

更らに他の論駁に對して彼の辯解する所を見よ、若し勞働が價格成立の當然の本質なりとせば、又た若し價格が當然、勞働を保護するものとせば、勞働を費せし所の物は如何なる物も價格を缺くと無かる可し、然れどもマルクスは明白に認む、勞働を費して而も價格を得ざる物ある事を、而して彼は之れに就て說明す、効用(Utility)を有せざるが故に價格(Value)を有せずと、「如何なる物件も有用(Useful)ならずして價格を有すると能はず、若し其物件にして不用ならんか、之に費されし勞働も不用なり、故に又た價格を有せず」マルクスは尙ほ進んで、有用にして且つ勞働による生產物も尙ほ價格を有せざる事ありと論せり、「自己の勞働の生產物によりて自己の要求を滿足する者は効用を生產すと雖とも而も價格を生產せず、或る商品、即ち單に使用價格を有するのみならず、交換價格を有する物件を生產せんと欲せば、單に自己に有用なるのみならず、他人にも有用なるものを生產せざる可らず」即ち社會的有用の物件を生產せざる可らず、生產者及び其他何人にも不用なる勞働生產物は如何なる種類の價格をも有せず、生產者には有用なるも他人には不用なる所の勞働生產物は交換價格を有せず、是れ他の要求を充さゞれば也、是れ生生過超(Overproduction)の場合に多く見る所なり、即ち此時に於ては何人も其物件を要求せざるが故に其物件は一時價格を失墜するに至るなり、ラッサレは此價格下落に就て說明して、是れ其物品を生產すべく社會的に必要なる勞働時間が縮少せるなりと言へり、而してマルクスは之に就て、是れ畢竟其勞働が社會的に要用少きか又は不用なるに因ると說明せり、然らば何故に其勞働は社會的に有用ならざるか？唯だ其產物が有用ならざるが故のみ、勞働の社會的効用の存否は單に生產物の社會的効用の存否に關する也、而して價格に影響する所のものは即ち後の條件なりと言はざる可らず、マルクスは殊更ら其條件の影響を無視せんとし、之を以て單に勞働の本質に附從するものと說明せんと欲したり、勞働と社會的効用とは共に等しく價格の構成要素に入る可き也、而してマルクスの誤謬は唯だ單に勞働の一條件を以て價格を定義せんとして効用を無視せるの點にあり。

△第二　賃銀論

總ての價格は勞働者の勞働に依て生ずはマルクスの結論なりき、彼は之より更に轉じて現存經濟組織の下に於て、勞働力の價格を定むるの標準は其勞働の造出する所の如何に在らずして、却て之を造出し又は改造するの必要如何に在ることを說示せり、經濟學者が說く所の賃銀の度合は勞働力の費用に依て決せらる、即ち賃銀は勞働者をして勞働の氣力を維持せしむるの費用と同等なるを原則とす、マルクスは此の生存費用てふ根據に來く伸縮自在なる說明を是認せり是れ元より勞働者自身のみならず其家族の生存をも包含す、何となれば、勞働者のするの時ある可し、而して勞働能力の永久の繼續には彼に代るべき新年の生るゝ、又す、故に又た其中には教育及び徒弟の費用をも包含すと云ふ可し。更に之に加ふるに老人に對する養老金を以てせざる可らず、是れマルクスの明白に說かざりし所なりと雖とも、素より彼の同意する所ならん、又た其生存費は氣候と國風とによって異る所の種々なる歷史的要素を包含するを忘る可らず、貨物の價格は正規の熟練(Normal skill)を以て之に寄與したる勞働の時間なり、正規の熟練を以て勞働能力を保持するには、時と國と習慣とに從つて、一定量の日用物と慰安とを必要とす、勞働時間中其日用物と慰安の一定量を生產せんが爲に用ゐたる部分は、之を必要的勞働時間(Necessary time of labor)と稱するを得べし即ち是れ勞働者が其生存維持に必要なる物を生產する所の時間なり、―而して此間に造られたる價格は之を必要的價格(Necessary value)と稱せらるゝを得べし、然るに勞働者の體力は尙ほ此以上の長時間勞働に堪え所べし、而して此殘餘の勞働時間は之を剩餘勞働時間(Surplus time of labor)と稱し其時間內に生せし價格を剩餘價格(Surplus value)と稱するを得、此剩餘價格は二種の方法を以て造り又は增すと得、即ち一は勞働者の生存費を引下げ又は安價にすると換言すれば必要的勞働區域(時間)を縮少するに依り　他は勞働時間を延長すると、換言すれば剩餘勞働の區域を增長するに依る、されど此の如き行爲は之を制止せざる可らざるの限界あり、生活手段の分量は勞働者の身體を維持するに缺くべからざる最低限度より下ると能はず、勞働の限界は勞働者の勞力、能力の堪え得る範圍を超えて之を擴張すると能はず、然れども此の範圍制限內に於ても大なる擴張を許すの餘裕を存す、剩餘價格の總額は勞働者に與ふるに僅に生活し得べき分量を以てし、而して勞働者が之に堪え得る限り之に勞働せしむてふ簡單なる考案中に存す、或る勞働者は一日十二時間勞役す、然し之より長時間の勞働に當に從事すると彼に堪えざる也、而して彼は三十錢の賃錢を受く、蓋し其三十錢を以て彼が要求する必要物を購求すべき也、然るに彼は六時間にして三十錢の價格を製作し得べし、彼は他の六時間の勞働に對しては何物をも受けざる也、其剩餘價格の三十錢は彼に賃銀を給する主人の爲めに造らるゝ也、一日六十錢の品を製作する勞働能力が、現在の制度の下に於ては僅に三十錢の價を有するに止まると云ふ如き結果を來すは、蓋し此原因に基くなり、マルクス曰く、此の如き曖昧なる結論は賃銀支拂てふ手段を以て假扮せらるゝ時間に對しては何等の證據を有する能はず、此貨幣を以て勞働の報酬を支拂ふの結果として、僅かに半日分を支拂ふて而して一日分を支拂ひし如く見せしむる也、封建時代の賦制度に於ては此の如き偽を存せざりき、勞働者は其主人の爲に一日を費し、自己の爲に一日を費せり、而して其總ての時日を勞働者自身の爲に費せし如く裝はす[illegible]下[illegible]存せざりき、然るに賃銀制度は實際支拂はるゝに支拂ひたるが如き假面を剩餘價格に裝はす也、[illegible]即ち全制度不公正の秘密なり、[illegible]主人との關係を解決とする普通の觀念の[illegible]なり、又[illegible]の自由に關する總ての誤謬の原因なり、賃銀制度は勞働者の[illegible]なり、又之に依て資本家をして勞働者が造出せる全剩餘價格を獲得するに適當ならしむれば也、即ち勞働者が自己の勞働能力を補充するに必要なる度を超過して生產せる物を資本家に横領せしむるなり。

以上論せし剩餘價格中に二種あり、絕對的と相對的と是なり、絕對的剩餘價格は剩餘勞働の延長に依て取得せらる、相對的剩餘價格は必要勞働の縮少に依て取得せらるゝもの[illegible]生活の必要費を安價にする所の發明に依て取得せらる、其前者の原因はマルクスをして正規の勞働時間に就て論議せしむるに至り、後者の原因は勞働階級に對する發明と機械との影響に就て論議せしむるに至れり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

魔

モーパッサン著　二葉庵覺非譯

七月五日

私は判斷力を失なつてしまつたのだらうか。昨夜見た現象などは全然お話にならない位恐ろしくて只考へたばかりでも頭がぐらぐらする。

昨夜も私は例の如く戸を閉ぢて錠をおろした、それから後で渇を覺えたので水を一杯飲んだ。程經て氣が付くと飲んだ筈の水瓶が又水で一杯に滿たされて居るではないか。でも其時は左程にも感じないで其儘氣味惡るい寢床に行つて恐ろしい眠りに就いた、二時間計りも經過たらうと思ふ頃ビリツと震るへて目が醒めた。此時の苦惱と云つたら到底想像の外である。不意に殺込みを凶手に襲はれた人が胸に短劍を刺されながらも飛び起きて、さて爲ん手段もなく徒に苦痛にむせび。血にまみれ呼吸も絶え々々に七轉八倒る光景を己の胸に描いて見給へ。私の苦惱は正しくそれだ。正氣に歸へると又渇いた。で私は蠟燭を點して水を飲みに行つた。水瓶を採り上げて倒にして見たが一滴の水も出て來ない。全然空虚なのだ。何うしたのだか全く分らない。が次の瞬間には私は途方もない恐怖に襲はれて座ると云ふよりも寧ろ椅子に崩れかゝつた。程なく又私は飛び上がつて身の廻りを見廻した。どうも眼の前にある彼の透明な硝子瓶が何んだか妙に怪しく恐ろしいので又ザツクリと椅子に倒れた。私は彼の瓶を見詰めながら色々の空想に耽つた。此間四肢は恐怖の爲めに絶ず震へて居た。誰か來て飲んだには相違ないがサテ誰だらうか？私だらうか？私は確に飲んだには相違ないが而かしとても一人で飲み乾した筈はない！若しか自分は睡遊病者ではなからうか。そして全く互に無關係な兩個の『吾れ』なるものを有して居て若し一個の『吾れ』なるその一個の『吾れ』が無意識の狀態にある時にも他の一個の『吾れ』なるものは絶え間もなく活動して吾が肉體を自由自在に運動させて居るものではなからうか

アヽ私の此心中の苦惱は到底他人には了解らないだらう、眠が醒めて居た時には一杯あつた水瓶の水が一寸眠つた間に全然なくなるなんて不思議な出來事は恐らく誰も了解らないだらうと思ふ。

余り氣持が惡るくて眠るわけにも行かないので遂に終夜泣き一睡もしなかつた。

七月六日

私は氣が狂ひそうだ。又々夜の間に水瓶の水が一滴もない樣になつて居た。私が飲んだに相違ない……が眞實に私が飲んだのだらうか。誰が飲んだらう。誰かな。神樣だらう？私は氣が狂つてるのか知ら？誰か救助て呉れる人はないだらうか。

七月十日

今から暫時パリに逃げ出す事とする。先日來大分弱つたが。よく考へて見ると原因の分明らない事にそんな大騷ぎをする必要は更にない事だ。なんかと、空威張しながらもう直ぐど神秘な魅力に脅迫される氣持がする。

七月十六日

私は昨日生れて初めてと云ふ大變な事を見せ付けられて又頭痛の種をこしらへた。

私の從弟のセブレと云ふのがリモウジユの狙擊步兵第七十六聯隊の聯隊長をして居たものだから昨日訪問して夫人と一所に晝食をした。其席に知らぬ年少な婦人が二人居合したが。其內の一人の方は當今精神病學の泰斗で而かも其治療に催眠術の暗示を應用するので高名なドクトル、パラン氏の令夫人であつた。

同氏の談話に依つて見ると最近の英國の科學者やナンシイの醫學校の教授連は催眠術を治療に應用して絶大な效果を救め得たと云ふ事だ、而かし其事實は神秘不思議到底吾儕の信ずる事の出來ないものであつた。

同氏は而かし其席でこの樣な事を公言して居た、余り不思議なものだから一寸紹介の勞を採る、以下は同氏の言[illegible]はない、吾等は今や催眠術の應用に依つて自然界の最も重要な秘密を發見しようとして居るのだ、言ひ換へれば地球上最も重要な秘密を發見しようとして居るのであるが[illegible]で特に地球上、とこしへ[illegible]秘密と混じれない[illegible]味はない。それで人々は[illegible]を作つて以來彼れ等の所有して居る不完全極まる感覺器を以てしては到底[illegible]大神秘に接した事を[illegible]これを理解する事の[illegible]科學的智識の補[illegible]と企て、居たのである。理解力が[illegible]幼稚な時代には此大神秘に接し[illegible]怖を感じ乍ら靈界の研究と云ふもの[illegible]閑に附せられて居た、而かしかゝる時代を經過して我々の心中には亡靈、怪物、精靈[illegible]んでは神佛などに關する信仰が段々と誘ひて來ると云ふ順序になるので、要するに造物主に對する宗教的の觀念と云ふものはこんな事から起こるのだから其根元に遡つて見れば極々凡庸極々不合理なものであるのだ

ボルテアも作てこんな事を云つて居る

「神は自己の想像に從がつて人間を作つたが其返報で今は人間が又自分達の想像で都合のいゝ神樣を作つて居る。」

大凡百年程以前から催眠術や其他の奇怪なる數の新事實を發見したが特に最近數年間の斯道の發達は驚く可[illegible]

以上はドクトルの眞面目に說法した大略であるがこれを聞て居たサブレ夫人は「どうだか」と云つた樣な微笑を口邊に浮べた

ドクトルも少々業腹になつて

「ぢや貴女試みに御自分でかゝつて御覽なすつては如何です？」

「えゝ。えゝかゝつて見ませうとも」

從妹は椅子に寄りかゝつた。

パラン氏はヂツと從妹を凝視て居る。

私の胸はドキドキとして咽喉が閉塞る樣に思はれた。漸時するとサブレ夫人の眼瞼は段々と重くなつて來た樣で口元が引きしまつて胸が押し付けられる如くに見え出すと間もなく眠むつてしまつた。

後方に行つて立つて居て御覽なさいとドクトルが云つたからその通りした處がやがてドクトルはポケツトから一葉の名刺を出して從妹の手に持たして置いて云つた。

石川三四郎著　十[illegible]月[illegible]日發行

虛無の靈光

本書は石川旭山が獄中日誌より宗教、人生に關する感想を摘記せしもの[illegible]本書は著者が亡父十三回忌に際し親族故舊に頒たんが爲め[illegible]也

虛無、空神光、[illegible]可離非道也、神、自由の原理、其他の題目あり

一部定價十五錢、郵稅六錢、十部[illegible]

[illegible]を要す、

發行所、東京府下[illegible]　世界婦人社

麥刈

[illegible]

若葉[illegible]と繩りて
[illegible]辛らく縮りたる
[illegible]畑今や金色す
寒さ飢えとに四閱月
收穫如何にと憂愁の
空も晴れゝ貧家族
妻刈る麥を父はたぐ
いとし子までも可愛手に
かして此所に群なして
日は[illegible]
[illegible]は燒[illegible]
[illegible]はいふの[illegible]かするよ」
人は[illegible]も[illegible]かに
炊けや今年の[illegible]作麥」
[illegible]ては[illegible]けり
自然の[illegible]や
畑良木に[illegible]の甘まさ
[illegible]に何か[illegible]む
[illegible]しさよ
[illegible]見よ
[illegible]は[illegible]ふ
小山の木[illegible]田の畔に
[illegible]と[illegible]
[illegible]八[illegible]無[illegible]なる
[illegible]の威力そは何ぞ
[illegible]見よ
蟻[illegible]笑ふ
夫は[illegible]は[illegible]秧へ
幼な子共も苗運び
[illegible]樂しさよ
[illegible]の[illegible]何時にある？
[illegible]見よ
堅く結ぶの双の腕
我[illegible]が武器の總べて也
所有[illegible]は無の殿
かつて我子は力ある
自由安樂の社會建てむ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎HK女の述懷

謹啓　亂筆御判讀あらまほしく候

仰ぎ敬し奉る福田先生様、妾は今病床に煩悶せる儚なる者にて御座候、嘗て先生の自叙傳を拜讀至し、さるあつかましき考を抱かんは、仲々に勿體なき限りなれど、實の姉上様の如き心地のみせられ、慕はしふ、なつかしふ、果ては物悲しき思にかきくれ候も、げに幾度にて候ひしならむ。

さぞや、はしたなき女と御さげすみ候はむ、妾も亦、無禮極まる所行とは、萬々存じ候へども、不幸なる妾の衷情を御推察下され、一片の御教示を賜はらば、妾の喜びこれに過ぎず候。

妾はもと或る藩士の娘にして、このあたりにては三四に位する豪家に生れ候ひしも、母上様の早や世をみまかり給ひて、後添の迎えられしより、二里ばかり隔りたる、いと淋しき片田舍の農家に、養女としてつかはされ候、をさな心の悲しわびしとは思ひ候ひしが、さのみは深く心咎もせず、さりながら、そは父上様の希望し給ひし如くは、妾にとりては幸福なるものにてはあらず候ひき、八年養育の大恩あり、一度親とし仕えまつりながら、かゝる僻言を申さむは思ふも恐しき罪の極みなれど、養父は殆んど、日々夜々、酒と色とに耽りて、相當の資產も瞬く間に費し果し、はては持ちて生れし美貌の、今は恐の、身の仇となりて妾はをぞましくも此の町第一のそれよとてはしたなき事を云ひよられ、詰しをられしても幾度、をこがましくも道の幾分を解せりと自任する身の、一も二もなく跳ねつけつ、あだし人の恨み、惡しみを買えることも幾度、これまでの苦心も水の泡……水……妾をして告白することも許させ給えかし、父上は空恐しうも、妾をば、人たる者のかりそめにも人踏みすまじき淵に賣り捨てむとはたくまれつ、海山の御高恩の、その萬一を報ずるは、他に其の途もありなむものを、たゞそればかりはと、思へど、それも親の御恩にて聊か教育を受けし身の、さることを容易くは、うけひくまじとてや、萬事は妾には極々秘密にて運ばれつ、妾は今三日すれば魔窟に投せらるゝ急場に及びて、始めて圖らずも之を洩れ聞きたる時の驚愕は……筆紙に盡し能はず候。

妾は此の相談にあづかれりと云ふ戸籍吏のもとに走りて、父上に此の事だけは思ひとまる樣御さとしありたき旨を、涙をもて御願ひまひらせ候も、黄金に目くらみたる彼の方には、一笑にも値せずして、冷かに、さることは知らずと跳ねつけられ候に、頼みの綱も切れ果て、更に暗黑なる心を抱きて、家に歸えり候、歸れば父上は妾をあさひき給ひて、二三日の中に横濱の親戚のもとに、遊びに伴ふべければその仕度せよ、面白き場所にもつれ行かめと、妾は何と答えまつるべき言葉も覺えざりき。

そは風淋しき夕にて候ひし、これまで養はれし御恩の深きを思はざるにはあらず候へども、そればかりは……寧ろ不孝の子となりて死ねばとも……あれや、これや、淋しき友達の身の上、我が身のこと、亡き母上のこと、醜業婦、——目先にちらつきて、辛き思はひしと計りに胸にてたえ候居堪えられぬまゝ、妾はそと家をぬけ出で身獨りにて桂川のほとりを、さまよひ候。

ほの暗き月の光にすかし見れば、岩が根に打ち寄する波白く、砕くる音は絶間もあらず、風吹きすさべば、水烟はさつと妾の頬を撲ちつ、かくて枯れ果てたりし松が根もとに座して、じつと水の面を眺め入り候時、妾は涯しらぬ虚空にある如く、暫しうつゝと相成り候、やがて重き首は次第にうなだれて、太息のみぞいとゞ切に迫り來り候、胸に湧き來る思は、只、死なむ、死なむ、死なむの一語のみにて候ひき、富士が根嵐はいとつらく身に吹き込み候、ふと心ひき立て、起ちあがり候ひしも——歸へりともなし。

かくてとぼ〳〵とあてとも無く迷ひ行きたるは、人里遙けき山の松林にて候、下弦の月は落ちて、ボンヤリと覺束なき三峰山の谿間には、闇の手低く動きて、其の底には妾が今立ちたる桂川の急流、怨めしげに呟き居り候、誠にはかなく、物悲しく、地獄の上にでも來たらむが如き心地せられて胸の苦しさは破裂せむばかりに相成候、妾もし泣き得ば此の苦みの幾分はまぎれも去りなむを、悽愴悲苦の感に心はたゞ悶え難みて、優しき涙も枯れ乾き候。

たしなみ深き世の令嬢たちは、あばずれ果てし女よと、嘸や御あきれ候はむも、そは妾の甘んじて受くる所にて候、老幹千樹雨の如く繁く、頽れ落つる夜嵐に、林木の戰ぎは、巖打つ怒濤の如く轟き候、妾の心は如何ありしや、妾へ狂ひてや居候ひしならん、恐しとも覺へ申さず、ふと心に浮びたるは、實の父上のもとにてかゝる時こそ訴もし、願もせめと、山を下りて途を急ぎ候。

或る所にては、六匹の犬に吠へつかれ候て、身も世も覺えぬまで慄へあがり、通り行く村の夜遊に出でありける若者たちには衣も裂けんばかりに苦められて、愈々辛き胸を抱きて漸く、たどり着きたる時は、露も、草木も眠ると云ふ眞の夜中と相成り候表門も裏門も、既にかたまりて開けむ術もなし、恥しくは候へども、止むなく塀を越えて内庭に下り候も、家の内は寢靜まりてしーんと致し居り候、如何はせむと心惑ひて、只々涙にのみかきくれ候ひしが、漸く氣を勵まして風呂場に廻り、炭屑をひろいて一首の和歌を認め、盆栽の松につるし候

武士氣質の一徹に、決して父と思ふなと仰がれ候御言葉は、まだ此の肝にきざみて忘れざるものを……此の體を以て、何の顏ありてをめ〳〵父上に見へ參らすべき……折しも、しわぶきの聲して、遙かに廊下を歩むは、まさしく義理ある弟のそれよ、近づき來らば呼びとめむものと、心躍りたる甲斐もなく、障子あくる音して足音はそこに消え候……妾は遙かに、我が家の方を伏し拜みて……。

これまでにて御免を蒙るべく候、只一事の述懷として御話し申し上げたきは——此所に母子の鯰あり、或る蒲燒屋の前の川まで來りし時、娘の鯰は立ち留つて、ちよいと、御母さん、なんて云ふおいしい臭でしやう、わたい喰べたいわ、すると御母さんは、いゝえ、あれはね、お前や私の樣なものゝからだを燒いて居る臭だから、急いであつちへ行かなければいけない、又つかまつて喰べられると大變だからね、されど娘の鯰は、自分のからだはそんな甘い味のするものかと、御母さんにかくれて、そつと尾より食し始めて遂に頭のみになりたりはつと心づきたる時は、泣けどもかけど、如何とも詮術なかりきと、人は笑もし給はむ、妾は此の話をきゝたる時は、いとも悲しき、いとも切なき心地して、涙とゞめ難く墜れ候、親の裡に育ちて世に猛鷲あるを知らざる世の女達の己が身を喰ひ、己が身を害ふとも知らずして、墮落の淵に誘はれ行くは、この憐なる娘鯰のたとへの如きものにて候、さても我が身は、妾は空しく榮華にあこがれて……？如何でかるることあらむ、只死にまさる恐しの境を逃れむと悶えて、遂にまた其の死にまさる——屈辱、醜汚、悲慘、忘れ難し彼の一夜——淺ましの身となり果ねるぞうたてき。

只祈えむ、天は我等に暴力に勝つの力を與へ給はざることを、今はた何をか云はむ、こはたゞ妾のみにあらじ、天下の志士よ、あゝこれ人生なり……憤ることを止めよ……妾は今はわびしき床に臥して養父のもとにあり、與え給ふは慈悲の藥か、あらずか、妾癒ゆるの日は、妾死するの日なるを惜しからぬ命ながらへて、妾はた何のための治療なるぞ、愚かなる矛盾なる哉、矛盾と知つて矛盾のことをなす、妾の心も亦矛盾せる哉、矛盾よ、嗚呼これ妾一生のシムボルにはあらざるか、春秋往き來る十八、そもやかち得しものは、何なりし、苦しみ繁き過去の記憶、暗黑なる前途、扨ては重荷に堪えぬ此の病の身のみ……あゝ嗚呼、益もなき繰言に——こも亦先生を我が姉上と慕ひまつればこそ、願くは許し給へかし、先生、されどこは法律にては拒み得べきものなるや、世界婦人の紙上にて一寸御教示の榮を賜らば、喜び之れに過ず候。

實に思出多き頃にて候、開け放ちたる窓の前に、菫、蒲公英、菜の花の香を籠めし春の夜は朧朧として浮び出で、闇の底には小流の獨り、何か分らぬことを囁きつゝ、呟きつゝ……萎えし寢卷姿、夕風の吹くにまかせて、妾身を燈にそむけて、悄然として窓に俯ければ——御なつかしき姉上様、先生の御著、妾の半生涯片手に、あはれ口繪の活きて語りもせむ御すがたよ、それにつけても、實の母上だに此の世にましまさば、あは許させ給へかし、ことわり知らぬ涙は新に溢れ來て、物のけじめも分ち兼ねつ候。あら〳〵かしく

罪多き妾の名は、余りに失禮には候へども、此所にかきしるすことを許させ給へかし、姉上にあまゆる、これぞ我儘なる妾の願の一つなる、人道のために御自愛遊ばしませ。敬具

H　K

敬愛する福田先生まいる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

放浪（六）

ゴーリキイ著　咫折生譯

三疋の巨大な、毛起つた犬が暗中から兩人を目懸て飛出した、シャクローは驚き怖れて痙攣を起し、慟哭しながら地上を跳廻り、私は濡てゐる外套を犬に投付けて、屈んで石か棒を探つたが、何物なくて草の刺を手に刺した、犬は虚に乗じて三疋が同時に襲擊して來た、私が二本の指を口に啣んで、痛を忍んでゐる時、敵は退陣して跡を晦まし、而して直ぐ伸び來る人の聲を聞つけた。

吾等は二三分間の後ち、四人の牧畜者が表に毛のある羊の皮を着て、燃える束木を圍んで環になつてゐる所に達た、默つて壓付るやうな、疑ふやうな眼色で睨みながら、私の物語を聽くのであつた。

彼等の内の二人は地の上に座つて、密雲のやうな煙草の烟を薫らせてゐたが、一人の翁は密生くて黑い不足のない髯に高い哥薩克頭巾を被つて、吾等の背後に、杖に凭懸つて立ち、四番の若い色の白い少年はシャクローの震へてゐるのを見て、自分の着てゐる外套を脫いで與へた、四方を見廻せば羊は互に押合つて橫はつてゐるので個々の象を明瞭り識別することが出來た、彼等は時々悲い、不安な聲で牟のであつた。

私は外套を焚火で乾かしながら、牧畜者に小舟に乘つて來たとや、總ての稀々な事實を精しく話した。

「小舟は何處にあるか？」と灰色頭の翁が私の方を向いて問ふた、答へて處を知らすと、

「ミヒアル！、行つて見て來い」ミヒアルと云ふ頭の黑い男は、杖を肩にして岸の方に去つた、シャクローが乾いた外套を脊に引懸けると翁は、態ふ云ふた。

「先づ飛ぶだ、飛廻ると血が暖まる、焚火の周圍を飛んで見るサ」

シャクローは最初翁の言葉を理解しないやうであつたが、突然起上つて恰度土人が焚火の周圍で踊る樣に舞踏を始めた、四人の牧畜者は可笑さに堪へ兼て、大きな聲で唄ひ、笑ながら腹を抱へて地上を摺廻り、翁は眞面目な顏色で、シャクローの舞踏を眺めながら、頭を振り、ヒステリーのやうに體を動かし絕えず沈んだ音で、調子外れの拍子を拍つた。

「ヘーイ、ヘ、ゾー、ゾ、ヘーイ、ヘ、ブルツ、ブルツ！」

束木は猛んに燃え、シャクローは蛇のやうに回轉り、種々な姿勢をしては兩足で調子を合しては蹈み、彼の體は水蒸氣を吐いて汗の玉に覆はれ、それが焚火の光に反射して血のやうに赤く見えた。

三人の牧畜者は手を拍ち、私は寒に震へて焚火に炙りながら、此の奇觀がコーペルユレス、フエルネの崇拜者を得て、而して破船者と親切な土人とが焚火の周圍で舞蹈を舞つてゐるのだ……………態う默考へる間に奇觀を演じた此處が……終局の場所ではあるまいかと不安に堪へなかつた。

シャクローは地上に座つて外套に包まり何か連に食つてゐたが、彼の黑い眼から放つ光は、私に不愉快な感を起させた、牧畜者がパンと鹽辛い豚家肉を私に與れた時、ミヒアルは回つて來、默て翁の側に座つた

「何うだ？」と翁が問ふた。

「小舟は彼處にあります！」とミヒアルは簡單に答へた。

「流れりやしなかつたか？」

「否え！」

皆默つて私の方を見てゐた、ミヒアルは誰に言ふとはなしに。

私は彼人等をスタニザ（哥薩克の殖民地）の市長の所に連て行くのですか？――稅關の官吏ぢやなし……………」

「既う愈々最終の時が來た！」と考へてゐたが、ミヒアルは續いて何も言はなかつた

シャクローは默つて唯だムシャ／＼食ふてゐた。

「……誰か彼人等を市長の所に連て行くだらう……稅關の官吏の誰かゞ……それは何も不思議はない、當然のことだ」と默つてゐた翁が云ふた。

「……稅關の小舟を盜むだなら、良心の苛責みは、これ又仕方のないことだ……………」

「ア、一寸お待ち下さい、御隱居……………」と私が話しかけたが見向もせず。

「盜むな！、ヤイ！、盜賊をして良心に羞ない者は、亦盜賊を働く」と翁は力を入れて、語り、豪とを言ふだらうと云つたやうな顏色で默つて點頭き。

「ムウ左樣だ！、盜むでも、心を改めるなら恕してやれ……………ミヒアル！、その……………その小舟は彼處に在るか？」

「ハア、彼處に！」

「何うなつてゐるか？、水に流されりやしないか？」

「否え、心配はないです！」

「左樣か、彼處に在るか、明日誰か來て乘つて行くだらう、何故汝等は彼樣空舟に乘つて來たんだ、へ？――だから……………丐乞の子のやうに……………生來でもなからう？、汝等は恐怖とを知らないのか？、どうだ？、テ！、テ！、向う半ヴエルスト沖であつたら大騷動だ、海に吹流されて、足探ても、問探ても手足は屆くのぢやない、へへ？、溺死だ、斧を放り込んだやうに、水に沈む兩人が！――ハ、ハ！、溺死、それで萬事は終局だ」と翁は默つて私の方を見て、髭を捻拗めながら嘲弄的の微笑を洩し。

「何故默つてゐる、若衆！」と私に云ふた。

私は彼の話が理解なかつた、のみならず吾等を嘲弄するのだと信じて。

『然うです、能く解りました』と憤然とし云ふた。

「何が？」と翁は興味ありげに問ふた。

「何でもない！」

「ナ、何故さう憤々する、理由がないぢやないか、若い者はこれぢやから困る」

私は默つた、實際憤る理由はない、その位のとは私だつて意識てゐたのだ。

「マア、一ツ食つてはどうです」と翁が續けた。

「欲しくないです」

「食ひたくない、欲しくない、要ない、と云ふても、然し旅の空では一片のパンも容易でない」

私は翁の親切な言葉に動されたが、自己を欺くとは出來なかつた。

「有何、旅が何だ、男子一疋だ……」と私は靜に云ふた。

「オイ、……此人等に其のパンと豚家肉を進よ、而して他に何かあるなら……皆！」

「去つのですか？」とミヒアルは云ひ、二人の牧畜者は翁の方を向て眼を視張つた。

「此處にゐても仕方がない」

「でも市長……………稅關には何うするんです」とミヒアルが迷を解いた、シャクローは火を攪廻し、好奇に外套から首を前の方へ延して、平氣な顏をしてゐた。

「市長の所に行つて何うする？、能く聞け市長の所に行つて此の人等が何をする、必要はないぢやないか……………如斯ことが面白けりや何日か行くだらう」

「ぢや小舟は何うするんです」とミヒアルが反駁した。

「小舟？、舟が何うした、彼處に在るだらう」

「在ります」

「在るなら可いぢやないか明朝イヴアシユカが來て埠頭の方に漕で行くだらう……………ケルチユの方へ乘つて行く、何も苦はないぢやないか？」

私は翁の顏を瞬もせず見てゐたが、彼の粘液質で日に焦、風や雨に曝されたやうな顏に微細の感動も認むるとが可能なかつた

「何か此の件に關て可厭なとが生れやしないだらうか」と心配さうに始めた

「汝が口を噤むで居れば、何も心配するとはない、此の事が市長に知れると此人等よりも吾等が罪を受けなけりやならん、無益んぢやないか澤山仕事があるのに、また此人等も――早く行なくちや、オイ汝さん方は行くかね？」と翁が問ふた。

「テイフリスまで……………」

「道は遠い！、マア考へて見い、市長に留められたら大變ぢやないか？、速く逃してやらなくちや……………どうだ、それが不可ないか？」

「……………」

「どうするんだ、逃してやらうぢやないか」と翁が灰色の髭を搖かしながら、堅く決心した何調で問ふたが、同伴の者は唯だ默つてゐた。

「ア、若衆！、氣を付て行きなさい――小舟は良いやうにして置く、別に異存はあるまい」と翁は手科をして云ふた。

「さうも難有う御座ます、御隱居！」と私は頭巾を脫いで云ふた。

「イヤ、如何して」

「眞に難有う御座ました、御恩は決して忘れません」と私は再び續けた。

「お禮を言はれては傷入る、マア氣を付てお去でなさい、惡魔の手に渡すやうなとはしないから」

『無益んとをして色々御心配を懸ました』

「へへへ……………如何して妄に人間を惡道に導かれるものですか、我が身を捻つて他人の痛さを知れと云ふとがある、何時、何處で、如何なとがあるか知れん、其時は互に面倒を見て手を握りませう、何時逢か解りませんね……………左樣なら……………御壯健で……………」と翁は帽子を脫つて吾等の前に體を曲め、同伴の者も底頭した、吾等はアナパに行く道路を訊ねて其處を去つた、シャクローは何が可笑いのか頻りに呵々笑つてゐた……………。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科（十二）

増田操

吾々人間の始めて母の胎内に宿るや固と一個の細胞に過ぎない、それが母の胎内から滋養分を吸收して一個の細胞が二個となり二個が四個に四個が八個と云ふやふに倍づゝ繁殖して數萬億個となり四肢五體が完成すると遂に胎内から產み出だされ始めて呱々の聲を擧ると共に此の世の空氣を呼吸するものである、されど其體微弱なれば母の胸部より分泌する乳汁に依つて生育し漸く運動し得るに至ればまた他より飲食物を取らねばならぬ、そして其體量増大して或る期に達すれば暫らく生長を止るのである、年を經るに從ひ細胞がまた減少するもので體の表面に皺の生するはそれが爲である遂に呼吸絶へ體温もまた無くなり全く活動も止みで所謂死んで終ふのである

この間の消息や母の胎内にあるは恰も草木の種子の土中にあるが如く春季適當の温度と水分に逢へば其芽を萠し漸次生長すると同じく吾々もこの世に生れてから凡二十四五歳までは生活力が最も盛んなる時であるから比較的能く食ひ能く飲み能く動く彼の細胞は減ずることあれども殖ゆる方が多いから益々其體格が發達するのである、二十四五歳より男女の間に子女を擧ぐるは尚ほ草木の花開き實を結ぶが如く恰も夏の時代である、早や五十歳にもなつたら秋の季節の野原の草と同じく其實は熟するも葉色褪りて黄色となり遂に葉萎み莖折れ全く枯れ果つるのである吾々人間も新に出來た細胞より子女が活動して居るから己が筋肉の張力を失ひ髮は雪を欺むき體軀衰へ遂に一陣の秋風と共に不歸の異郷に逝くのである、猶は人間の體軀を滊車に譬ふれば其骨格は機關の如く飲食物は石炭の如し精神作用は機關手の如くであらふ若し機關にして損する所あらば機關手たる精神如何に活動せんとするも到底進行することが出來ない、又機關如何に完全なるも機關手が如何に巧みなるも石炭がなき時は運轉することが出來ない、人間もこれと同じく體軀强健に精神健全に活潑に能く向上せんと欲せば衣食住を充分に取らねばならぬ

而かも色欲は人性自然の情操にして色を節すれば渇し食を節すれば飢ゆ色を節するは尚ほ可なり食を節するに至つては直に寂寞たる地中の白骨と化す、されば飲食物は直接と間接とを論せず身體の營養構成に必要なる原質を備へたるものを取らねばならぬ、その營養分は消化機に依つて二種の作用を營み一は筋肉骨格などの消耗するを補ひ他は呼吸器に依つて吸入する空氣中の酸素と化合して炭酸を生じこの酸化即ち燃燒作用に依つて體温を生ずるものであるから飲食物は人體の成分の消耗を補ひ體温を保持すべき物質を取らねばならぬ、そして人體の成分は蛋白質、脂肪、水、無機質物より成るものにしてこれ等の物質は各種の飲食物には多少含有すれども主として動物質即ちいろ〳〵の肉類、卵、乳などは含量比較的多く又吾人の常食とせる米、麥、豆などにも少なくない、或は燃燒作用を起して體温を保たんには多量の炭素質を要る、含水炭素即ち澱粉又は脂肪分も要る、故にこれ等の物質を含有する穀類野菜を食はねばならぬ、其生活狀態に依つて成形質及び燃燒質を要するの多少あるは勿論である、農家の如き日々勞働せるものは燃熱質たる穀類野菜のみを以て食物とすれば、到底其消耗を補ふに足るまいこれに反して身體を勞働せざる遊逸なるもの、動物質即ち肉類などを常食とすれば燃燒に必要なる炭素に欠くを以てこれを體内の脂肪質より仰がねばならぬから遂に身體衰弱するのである

それ斯の如く食物の要素に注意せざるべからざるものにして其分量に過否ある時は身體に異狀を來たし其配合宜しきを得る時は身體健全にして活力充實するのである、今や農家は科學的思想に乏しく其食品の要素を知らざるもの少なくない、試に身體の保全上必要なる食品の要素及び分量を書いて見やふ、含水炭素百四十匁、脂肪四匁、蛋白質十八匁、鹽類一匁三分、水一升五合となる含水炭素とは澱粉糖分をも總稱したるものである（未完）

○都下の同志に訴ふ　英子

収支償はず、經濟困難の中にも、一年有半の間本誌を持續するを得たるは全く讀者諸君と寄書家諸君の御助力によるのです、然るに本誌は此夏期に當りて非常な困厄に陥り、並々にては到底維持すると能はざるに依り、私は某婦人と共同にて呉服物の取次販賣を始め、炎暑の中にも一日の安息を爲せしと無く、市中の知友間を馳せ廻りて購買を請ひ、辛くも無事に本號を發行するとが出來ました、斯の如き事情なれば、○都下の同志諸君にして若し衣服を新調せんとする方は何卒吾等の事業御助の積りにて御注文を願ひます、價格は左程安直にする譯には參りますまいが、品物は確實なるものを精選致して差上げます、苦しき商業の實驗も追々紙上にて申上たい考えです

●手紙片々

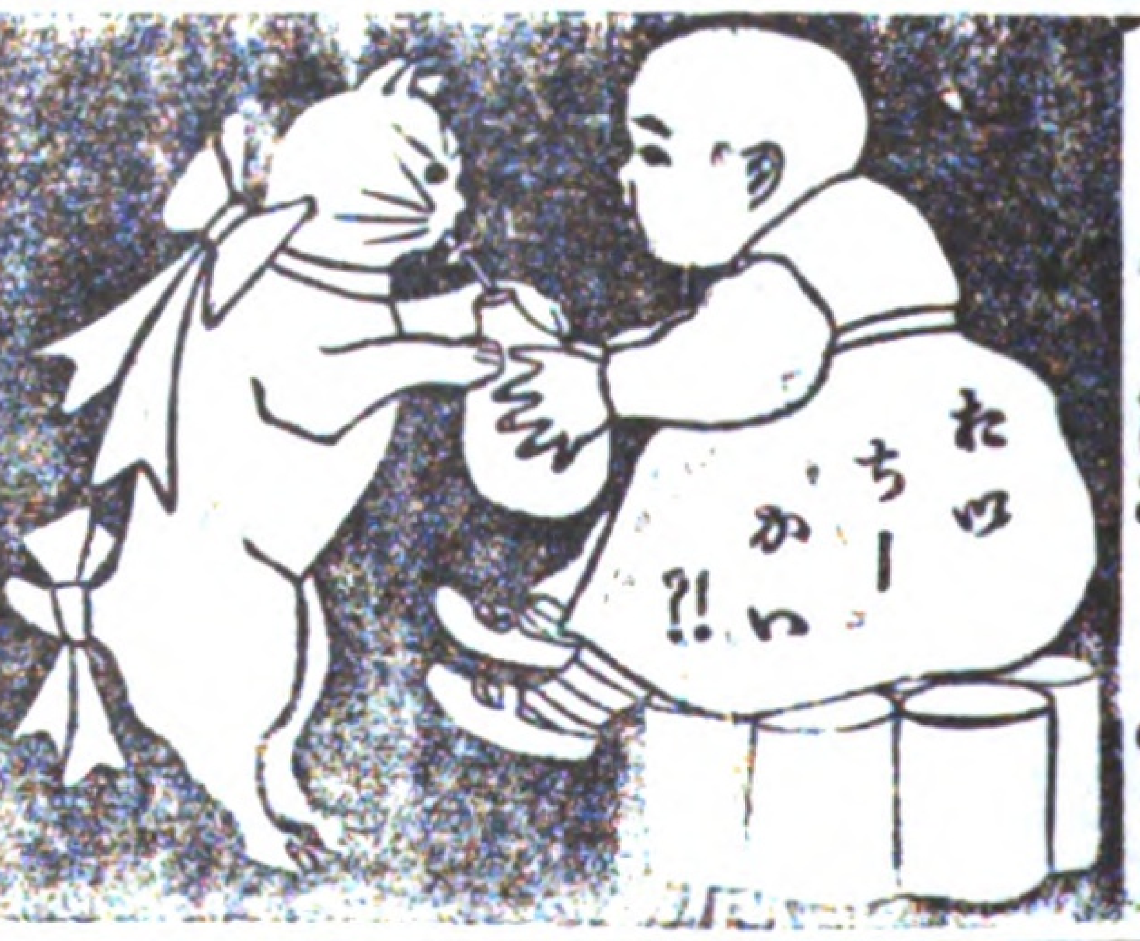
▲高野消癡氏より（樺太）　新聞で御地旋風天災不尠との事見へましたが、貴家御障りも御座いませんか、御伺申上ます、此地昨今兩日移廳式で雜踏して居ます。

小池靑陽氏より（信州境村）　福田さん、殘暑の昨今御地は尚炎くが如く困難ならんに別に御變りもわらせられず候や、小生無事殘忍なる資本家の奴隷に呻吟いたし居り候當地は朝夕凉風來りて、キリギリスの啼く音もいと哀れに覺え候。

▲遠藤友四郎氏より（高崎）　今朝突然呼出狀なるものが舞ひ込みました、東北評論の被告事件に付九月二日公判開廷するから前橋地方裁判所へ出頭せよと云ふのです罰金か入獄か、何でも來い、萬事は期する所だ、呵々（東北評論社、八月廿日）

▲高野常藏氏より（秩父）　希くは世界婦人が社會進化の指導者となり、吾人自由の渇望者の爲に希望の泉となり、生命となりて、着々其責を盡し、健全なる發達を遂げん事を。

伊豆三島 花島煉乳場製
名譽ある
金鵄ミルク



發賣元 東京市日本橋區大傳馬町 逸見山陽堂（電話浪花二一五一番 振替貯金口座三二九六番）

（毎月一回 一日發行）東北評論（一部代郵税共四錢）
……十部前金郵税共三十五錢廿部六十五錢……

第貳號（九月壹日）要目
●社會主義と社會……無懸
●無政府主義と自然主義……高畠
●剩餘價値論……同
●基督教評論……遠藤
●木下老人に教を乞ふ……同
●犬死する勿れ……同
●兵士の犯罪……無懸
●人間の死場所……同
●巴里の大ストライキ……同
●小說『蚊帳』……友
●其他……內外

高崎市柳川町十二番地　東北評論社

根本正君譯　片岡健吉君序　日々の力　紙表紙三十五錢　クロース表紙五十錢　郵税六錢

本書は一月一日より十二月卅一日に至る一年三百六十五日間に於ける居家處世の大本を示したる者にして、毎朝其當日の部を一頁宛讀むべき者とす、世人之を繙いて反覆讀誦せんや、新氣力新生命は自ら其の間に生じ來りて無限の快を得べし、故に聖書と等しく一般家庭に必ず備へられんことを推薦す。

日本メソヂスト監督　本多庸一先生　說教集　紙質精撰寫眞入金六十錢郵税八錢

是非先生獨特の通俗的思想を以て深遠の眞理を極めて平易に懇切に說話せしもの、今日までありふれたる飜譯的口吻なく先生が特創の思想を以て日本の人情に投合し、一言一句餘韻嫋々として感興措かざらしむ　請ふ一本を座右に置かれんことを

バウン博士著　小山正武氏譯　基督教天啓論　定價金二十五錢郵税金四錢

今や世界生存競爭の洪潮大濤は彌々益々激しくして地球を震撼しつゝあるにわらずや、此の大試煉に逢ふて屈せず撓まず奮闘猛進して善々其の靈的經略を完ふし、之を向上し以て善々其の平和を永續し得べきの途は他に非ず唯敬虔を以て聖書を活讀し、實行するにあるのみ、バウン博士の此著極めて簡明、聖書研究の第一義を示せる者實に今日初心信徒の爲めに不可缺的指針と爲り燈臺となるべきは此書也

ジョン、アール、モット氏述　瀧浦文彌君譯　活ける基督信徒　定價金三十錢郵税四錢

政治家並モット氏を知る者は多し而かも靈活の氏を知る者少し、氏が十餘年靑年事業として其經驗見聞に基き本書は正しく偉大なる人格の反映なり、發露なり、之に依りて其の今日あるに至りし所以を曉る時人は、身に少なからぬ感化を認めざるを得ざるべし、敢て諸君の購讀を乞ふ

ジエ、ルドン原著　美山婦人、田中榮兩女史譯　七日間　定價金三十五錢郵税金四錢

道に迷ふた人の子が、たうとい愛の力によつて救はるゝ、世にも美しい物がたりを、しい筆にて寫し出した此の本は、今の讀みものとして極めて適當なものでは御座いますまいか、迷ふ人も救はれた人も是非一度は御讀みなさいませ、そして此の小さい一冊の中に深い教へと盡きぬ慰めとを御見出しなさるならば譯者二人は苦心の空しからぬを喜ぶで御座いませう

其他諸大家の名著澤山有之候品切にならざる内至急御注文を乞ふ

東京銀座四丁目一　內外書肆　教文館　電話新橋二五二六

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○我社は保險契約者（即會員）に毎年剩余金を分配して漸々保險料を輕減し又は配當金を一時拂濟保險料に振替へ保險金額を增加す
○我社の營業費は他會社に比し遙に少し此經費の少きは即ち契約者の負担輕きを示すものなり
○我社は保險金の仕拂又は解約に際し（其年度の拂込濟保險料が一ケ年分に滿たざるとき）所謂未收保險料を差引く事を爲さず

第一生命保險相互會社

東京日本橋區通三丁目一番地
電話本局一三七三、一七三七、

各種 肖像畫
畫家 浦田烏城
神田美土代町二の一

▲九月號（東京日本橋通）春陽堂▼

新小說

小說 隣……小栗風葉
▲新聞記……伊藤銀月
◉秤皿……山田桂華
▲腴脟街道……磯萍水
傍觀生活……宙外
自然と藝術……蒲田泣菫
批界瑣言……水口微陽
僕の立場……中島孤島
妙義の夏……佐々木信綱
現代弊風の婿正……谷本富
明治座白虎隊……綺堂
大隅一座の評……秋聲
我家の接客法……實然
家庭と茶式……宗知
苦しき事、樂しき事……
（廣津柳浪、幸堂得知、小栗風葉、高濱虛子）
クラッシズムの意義を論す……田中喜一
子規居士の文章……高濱虛子
一顆凉あり……
▲本號には附錄
▲朝野諸大家及夫人九十餘氏の執筆▼
●實價郵稅共二十七錢五厘●

◉七寶側御婦人用時計

●第壹號　正價金拾圓也

七寶側十三形片硝子器械ロルゲンシリンドル石入側鍍金實裏面体裁上圖ノ如シ

●第貳號　正價金八圓半

七寶側十三形片硝子器械ロルゲンシリンドル石入龍頭銀製裏面体裁上圖ノ如シ

●第參號　正價金七圓半

七寶側十三形片硝子器械ロルゲンシリンドル石入龍頭銀製裏面体裁上圖ノ如シ

以上裏面七寶（赤）（紫）（萌黃）（淺黃）等ノ各種同價
又盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價ノ事
◉市外送料金拾貳錢
東京市京橋區尾張町貳丁目振替貯金口座五九六六
時計及寶玉類內外雜貨賞今美術品商　天賞堂本店
電話新橋特三三三、三一〇、一五三
電話（東七三三）天賞堂大坂出張所
電話（本二六〇）天賞堂神田出張所
電話（八七六）天賞堂橫濱出張所
電話（二二九）天賞堂長崎出張所

淚紅醫院長
醫士　一瀨鷹一
一院　日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院　神田區通新石町十八番地
學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

◉齒科治療◉
自午前八時至午後六時
齒科醫　吉瀨才市郎
東京市神田須田町二十六番地
◉學生勞働者諸君に限り藥價手術料共半額
●晝間執業者の便を計り夜間十時迄治療仕候

小兒科
內　科
婦人科
毎日自午前八時至午後六時
淺草區馬道町三丁目
小牧醫院

……▲書店廣告▼……
◉聖書其他基督教書籍を正直廉價を以て販賣仕候
神田區駿河臺西紅梅町十二
中庸堂

德田秋聲著
秋聲集
定價九十五錢　郵稅八錢
秋聲氏の手腕は其短篇に於て現はる氏の從來の作品にして尤も文學的價値に富めるものは其短篇にあり本書は氏の最近の短篇十餘を蒐めたるもの

正宗白鳥著
何處へ
定價八十五錢　郵稅八錢
本書は紅塵以來の白鳥氏の短篇集なり、何處へ、玉突屋、五月幟等皆好評嘖々たりしもの遠からずして瀟洒なる一卷となりて諸君の机上を飾るべし

東京麴町區飯田町　易風社　振替一二〇三四番

時間の狂はぬ時計!!
流行に魁せる指環!!
最も氣の利いた時計と最も品格の良い指環を最も廉く最も便利に御求め遊ばさるゝには？
三越呉服店發行【時計と指環】と題する寫眞版の美麗なる冊子を御一覽被下度候。時計の取扱法より其種類流行はいふも更なり、指環の撰擇法に至るまで、悉しく記して漏す所なし。本誌讀者諸君に限り御一報次第御送付可申上候。

【鞄及旅行具目錄】【靴及付屬品目錄】
製本出來仕候
御一報次第御送付可申上候

東京日本橋 三越呉服店
（振替貯金口座番號三〇〇番）

◎定價
▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓
▲申込は總て前金の事
發行兼編輯人　神崎順一　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番
印刷人　遠藤友四郎　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
發行所　世界婦人社　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
印刷所　博眞堂　東京市神田區雉子町三十四番地